(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 11 月 2 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 24名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3873300283
事業所名	グループホームつじい
(ユニット名)	西館
記入者(管理者)	
氏名	光田 陽子
自己評価作成日	令和 4年 10月 16日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 私達のホームは入居者の皆様の個性を尊重し、地域と共存し、共に生活することを旨とします。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ・自己評価を一般職を含めた全員で行う。 一般職も少しずつではあるが参加してもらっているが、まだ不十分である。 ・介護記録の書き方に関する研修等を通じてスキルアップを目指す。 職員によって書き方の内容に差があるので、研修の継続と個別の指導が必要。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 介護保険制度が施行されてから、まもない平成12年6月に開設され、23年目を迎える事業所は、市内中心部の幹線道路の面に立地している。近隣には、スーパーやコンビニエンスストアなどの店舗、交番、郵便局、市役所などが点在して、利便性が良いほか、事業所から、田園風景や石鎚山系の山々も眺めることができる。また、比較的近い場所に母体クリニックもあり、毎日の利用者のバイタル表等を取りまとめ、利用者の健康状態等を報告するほか、月2回程度、主治医が健診や往診で来訪して健康管理を行うとともに、24時間体制で訪問看護と併せて連携が取れ、利用者や家族、職員には安心感がある。事業所での看取り介護の支援を希望する利用者や家族も多い。さらに、コロナ禍において、外出や面会などの制限が設けられているものの、医師と相談して感染状況を見計らいながら、条件付きで家族と居室内での10分程度の面会に対応したり、家族と一緒にお墓参りに出かけたりできるよう支援するなど、利用者や家族から喜ばれている。コロナ禍を含めた課題は残るものの、管理者やユニットリーダーを中心に、レクリエーションやコミュニケーションを取り入れながら、利用者がゆったりと穏やかに楽しむある生活が送れるよう支援している。</p>
--	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	一人ひとりの思いや希望の把握に努め、できる限り本人の意向に添って生活が送れるようにしているが、現状では対応が困難な事もある。	○	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は思いや希望を聞き、フェイスシート等に記載をしている。また、日々の生活の中で、職員は利用者から思いや希望などを聞くほか、意思疎通が難しい利用者には、筆談を活用したり、表情や行動等から思いをくみ取りつつするよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	△	日々の生活での関わりの中で、本人の行動や表情から意向を把握できるよう努めているが、家族さんの意向や職員の意見が強くなる事がある。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	よく面会に来られる家族さんに対しては話し合う機会があるが、遠方であったり面会が難しい家族さんに対しては電話・手紙等でやり取りは行っているが、話し合いまではできていない。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	個別のケース記録を行っているが、細かな部分まできちんと記録ができていない事がある。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	職員間で話し合い留意しているが、どこまで本人の思いを汲みとれているかは判断が難しい。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	△	入居時に本人や家族さんから聴いており、必要に応じ面会時や電話等で把握できるよう心掛けているが、把握できる情報には個人差がある。	/	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は法人独自のアセスメントシート等を活用して、入居までの経過や生活履歴、日常生活の状況、介護の問題点などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、利用者から情報を聞き取るほか、電話連絡時に家族から情報を聞くこともある。さらに、遠方の家族や事業所に任せきりとなる家族もいるため、情報収集ができないことも多く、以前利用していた施設の関係者や介護支援専門員等から、少しでも多くの情報収集に努めている。加えて、把握した情報はアセスメントシート等に記載して、職員間で情報共有するとともに、3か月に1回の介護計画の見直しの際には、情報を更新している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	本人が現在できることを日々の生活の中で把握に努め、職員間で共有できることをしてもらっている。状況が変わった時には、その都度対応している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	ケース記録や業務日誌、申し送り等で情報を共有し、日々の変化を把握できるよう努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	△	ミニカンファレンス等で話し合いを行っているが、職員間での意見交換に止まってしまっている。	/	/	○	事前に、利用者や家族から意見を聞くほか、医師や薬剤師等から指示やアドバイスをもらっている。また、把握したアセスメント情報をもとに、3か月に1回ユニットリーダーを中心に、利用者の現状を確認して評価を行うほか、毎月実施するミニカンファレンスを活用して、ユニット毎に職員間でより良いサービスが提供できるよう検討をしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	検討した内容に基づいて、話し合いを行っている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人や家族さんの意向、職員の意見も踏まえ現状に合わせた介護計画を作成している。	/	/	/	事前に、利用者や家族、医師などの関係者から意見を聞くほか、アセスメント情報や職員の気づきシートを参考に、3か月に1回ケア行動計画・チェック表、施設介護支援経過表、バイタル表等を確認して評価を行うとともに、ミニカンファレンスを活用して職員間で話し合い、ユニットリーダーである計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、利用者や家族から出された意見を目標やサービス内容に反映された計画となるよう努めているものの、疎遠や「お任せします」という家族もあり、計画作成が難しい場合もある。さらに、サービス担当者会議の要請に、話し合った内容が記載されているものの、コロナ禍において、外部から会議に参加していないと思われる参加者名の記載が見られるとともに、ほとんど変化が見られない場合は、前回と同じ内容の記録が残されているため、記録の記載方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	△	家族さんによっては職員にお任せになってしまっている事もあり、きちんと意見やアイデアが反映できているとは一概には言えない。	/	○	/	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の方でも居室ばかりで生活することがないように、できる限りホール等で過ごせる機会を作れるようプランを立てている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	職員にお任せになってしまっていたり、地域との協力体制等が難しくできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	△	介護計画の内容把握や理解が十分にできているとはいえず、職員間で共有できるような努めているが伝わりきれていない。	/	/	/	ミニカンファレンスの中で、介護計画の内容を話し合っているほか、各ユニットにある事務室に個別のファイル置き、職員はいつでも目標やサービス内容を確認できるようになっている。また、介護計画のサービス内容が転記されたケア行動計画・チェック表に、実施状況を○×などの印を付けて、計画に沿って連動された記録を残すことができている。さらに、記録が日誌や施設介護支援経過表、バイタル表等の多岐に亘っているため、重複された記録を簡素化された様式の検討を行うなど、職員負担が少しでも軽減されることを期待したい。加えて、特記事項の欄に、分かりやすく色を変えながら、利用者の状態の変化や様子などが分かりやすいような記録を残すこともできている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	△	記録を行っているが、振り返りに関しては不十分な面がある。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	3ヶ月に1度見直しを行っている。また、本人の状態に変化が現れた時は、その都度見直しを行っている。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	△	状況に変化がみられない場合は、月1回の現状確認はできていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	△	状態に変化があった場合には、その都度見直しを行い新たに介護計画を作成しているが、家族等やその他の関係者等を上手く巻き込めていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的、緊急時とも、その日に出動している職員を中心に話し合いを行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	△	意見交換がし易いよう、一人ひとりに話を振ったり、気づきシートを使ってその場では発言し辛い職員からも意見を聴けるよう工夫している。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	できる限り多くの職員が参加できる日を決めて行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	△	日々の申し送りで十分に伝わっていなかったり、必要な情報が抜けている事があるので、十分とは言えない。	○	/	/	日々の職員の交代時には、業務日誌や個別のケース記録等を活用して、各ユニット毎に口頭で申し送りを行っている。また、職員は出勤時に業務日誌等の確認を行い、確認した日付とサインを残し、伝達漏れがないように努めている。さらに、毎日の夕方には、管理者等がバイタル表等を取りまとめ、母体クリニックに利用者の状況の報告して情報共有を行うとともに、健康管理に繋げている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	一人ひとりの「その日したいこと」の把握に努めているが、対応はできていない。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	可能な限り自身で決定できるよう支援している。意思決定が困難な利用者さんには、声掛けや本人の表情等から汲み取れるよう努めている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	可能な限り本人のペースに合わせて支援ができるよう努めているが、日々の業務に追われ疎かになっている事が多い。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	一人ひとりに合わせた声掛けを行い、ゆったりとした雰囲気づくりを心掛けている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるように支援している。	○	表情や反応から少しでも本人の意向を汲み取れるよう心掛けている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	△	言葉遣いや態度に気を付け行動しているが、全ての職員ができていないと難しい配慮に欠けてしまっている事もある。	○	○	○	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーを意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	羞恥心やプライバシーに十分配慮し行動しているが、業務に追われていたりすると疎かになってしまう事がある。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーを意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	不必要な入室は避け、本人への声掛けを行い確認を取っている。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーを意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	全ての職員がきちんと理解して実行できているとはいえず、プライバシー保護や個人情報保護について研修等で理解、遵守に努めている。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーを意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	家事(掃除、洗濯、炊事等)で利用者を手伝ってもらう事もあり、その行為が終わったら感謝の気持ちを伝えるようにしている。				洗濯物たたみや食器拭き、掃除などを手伝ってもらった場合には、職員から利用者へ「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、世話好きの利用者もあり、励ましの声かけや車いすを押すなどのフォローをしたり、寝たきりなどの状態となった男性利用者へ、他の男性利用者が居室の入り口を開けて声をかけると、手を挙げて応えたりするなど、相互に助け合う場面も見られる。さらに、職員は利用者同士の関係性を把握し、気の合う利用者が近くに座れるように配席をするなどの考慮をしている。中には、不穏な利用者がテーブルをガタガタと動かし、言い合いなどのトラブルになりそうな場面も見られるものの、早期に職員が間に入り対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	職員が間に入り、見守りを行い利用者同士が支え合って暮らしていけるよう支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	座席の位置を工夫したり、見守りを行う中でトラブルになりそうな時は間に入り対応している。また、利用者同士の関係性の把握にも努めている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルを未然に防げるよう、必要な時は職員が間に入り場面を変えたり気分転換を図る等の配慮をしている。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入居時に話を聴き情報収集に努めているが、細かな人間関係までは把握できていない。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	友人・知人が会いに来られたり、家族さんが馴染みの場所へ連れて行ってくださる事はあるが、こちらから訪問することはできていない。コロナウイルスの影響で外出・面会が制限されている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	全ての人にはできておらず、職員の業務の都合に合わせてもらっていることが多い。また、外出が嫌いな方は1日室内で過ごされている。重度の方は、無理のない程度に日向ぼっこを行っている。又、コロナウイルスの影響で外出は出来ない。	×	×	△	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられており、天気の良い日には、屋外の駐車場に出て、外気浴やラジオ体操、簡単な散歩をしたり、花壇に花を植えたりするなど、職員は利用者も少しでも気分転換を図れるよう支援している。コロナ禍以前は、地域のイベントに参加したり、ドライブをしてコスモス畑などに出かけたりすることもできていた。また、重度な利用者も、同様に車いすを使用して屋外に出て外気浴をしたり、居室の中だけに留まることなく、リビング等で過ごしてもらったりするよう支援している。コロナ禍の収束後には、多くの外出支援が再開されることを期待したい。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	地域の人やボランティア等を活用しての外出支援はできていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	△	認知症やBPSDに対する理解を図っているが、認知症だけでなく精神疾患を患っているケースもあり、その時の気分によって上手くいった事も上手くいなくなる事もあり、対応が難しくなる事がある。				職員はオンライン配信の研修で学び、認知症状等の理解促進に努めている。6か月に1回、「改定長谷川式簡易知能評価スケール」を活用して検査を行い、利用者一人ひとりの認知度の進行具合等の確認をしている。中には、精神疾患を伴う利用者もあり、支援が難しい場面も見られるものの、医師に相談しながら対応している。また、ラジオ体操やマッサージ、パズル、ドミノ倒しなどを取り入れて、職員は利用者の心身機能の維持にも努めている。さらに、利用者自身で、できることやできそうなことは時間がかかっても自分でも自分でできる部分のサポートや見守り、待つ介護を心がけた支援に努めているものの、時間がかかりすぎる場合には、つい手を出してしまうこともある。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	△	認知症によるものと疾患によるものとの区別がきちんとできていない職員もあり、適切な維持・向上が図れているとはいえない。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	なるべく、本人のできる事、できそうな事に対しては声掛けや一緒に行う事で維持に努めているが、つい手が出てしまう事がある。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	△	一人ひとりの有する力の把握に努めており、日々の生活の中からも新たな発見があれば、職員間で情報を共有している。				食事の際の後片づけや食器拭き、洗濯物干しやたたみ、掃除など、日々の生活の中で、利用者に役割を担ってもらい、職員と一緒にいけるよう支援している。中には、花壇の花の世話を楽しまれている利用者もいる。また、利用者の高齢化や重度化に伴い、できる役割は減ってきている。さらに、職員は利用者の好きな話題などの声かけをしたり、パズルやドミノ倒し、カラオケ、作品づくりのレクリエーションを取り入れたりするなど、楽しみのある生活が送れるような支援に努めている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	一人ひとり役割や楽しみをもって生活が送れるよう支援している。だが、全ての方に対して役割や楽しみごとを作ることは難しく、上手くいかない事がある。	○	×	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	△	自分で選ぶことができる方は好みに合わせて身だしなみを整えてもらっている。だが、重度の方は職員が選ぶ事が多い。				毎朝、自分で着る服を選び、化粧水や椿油などを付けて、おしゃれを楽しんでいる利用者もいる。中には、職員が化粧などのおしゃれを支援することもあり、化粧品等の付ける順番を間違えると指摘する利用者もいる。また、自分で電気シェイバーを使用して髭剃りをする利用者もおり、職員は剃り残しなどのフォローをしている。さらに、衣服の乱れや汚れなどが見られた場合には、職員がさりげなくフォローをしたり、居室等へ移動して着替えてもらったりするなどの対応をしている。加えて、重度の利用者にも、可能な範囲で好みの服に着替えてもらうなどの支援に努めているものの、職員が服を選ばざるを得ない利用者も多くなってきている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるよう支援している。	△	家族さんの協力を得ながら、本人の好みの服装や持ち物で整えられるよう支援している。				
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定が難しい方には、声掛けと一緒に考える事で本人の気持ちに添えるよう努めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	季節に合った服装を心掛けているが、その人らしさの工夫はできていない。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくてカパーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣類の着方が間違っていたり汚れがみられたら、さりげなくフォローしている。だが、髭剃りは不十分な事がある。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	行きつけの理容・美容室へ行かれる方は殆どいない。ホームへ毎月第2金曜日に訪問があり、そちらを利用されている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	できる限り、本人らしさに気をつけた髪形や服装になるよう支援している。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の準備や片付け等、一緒にできる方と行い支援している。				以前は、職員が調理をしていたものの、事業所では利用者への支援を優先させるために、業者の管理栄養士が立てたバランスのよい献立の湯煎する食品を活用するとともに、ユニットで炊飯等を行い、盛り付けて利用者に食事を提供している。食事の準備や後片づけ、食器拭きなど、できることを利用者へ手伝ってもらっている。アレルギーや苦手な物がある利用者の情報は、事前に業者に伝えて、代替品などを用意してもらうことができている。中には、バラ寿司などの食べたい物をいう利用者もおり、コロナ禍以前は、ファミリーレストランなどに外出に出かけることができていたものの、現在は職員がスーパーなどに好きな物を買に行くなどの対応をすることもある。また、行事等の際には、季節に応じた業者の特別メニューを提供することもある。茶碗と箸、コップなどの食器類は、入居時に使い慣れた物を持参してもらうほか、利用者の状態に合わせて、事業所で用意した使いやすい物を使用している。食事の際に、同じ食卓を囲み、同じ物や職員が用意した弁当などを一緒に摂るよう努めているものの、居室等での食事やサポートを必要とする利用者も増えてきており、時間をずらして食べることも多くなっている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで盛り付け等をしていることもあり、利用者は食事の匂いが漂うとともに、献立を利用者に伝えながら、食事の雰囲気味わえるよう努めている。加えて、管理者等が業者に要望を伝えることもある。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	買い物や食材選びはできていないが、調理や後片付け等できる事は利用者と一緒にやっている。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できる事は一緒になって行うよう掛け、行った後は必ず感謝の気持ちを伝えるようにしている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居時に嗜好の有無を確認しており、入居後も好きな物、嫌いなものがあれば職員間で情報を共有している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのものを取り入れている。	○	なるべく季節感を感じられる献立や食材を使うよう心掛けている。ひじきや切り干し大根など、昔からよく食べられている食材も取り入れるようにしている。利用者・家族さんから好き嫌いの有無を確認している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしい盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	一人ひとりの嚥下状態に合わせて、主治医、職員間で相談しながら食形態を決めている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	なるべく本人の使い慣れたものを使用するよう努めている。また、本人の身体機能に合わせて、軽いものや割れにくいものを選択するようにしている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	なるべく一緒に食卓を囲んで一緒に食事をしよう努めているが、食事介助をしなればいけない利用者もいて同じ時間に食べる事ができない事が多い。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	△	利用者の方が過ごすホールで調理を行っており、献立を伝えたり調理中の音やにおい等で雰囲気づくりに配慮している。		○	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	十分な食事が摂取できるように努めている。水分は、1200mlを目標として、飲み物や飲み方を工夫している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	食事の摂取量が少なかつたり十分ではない場合は、主治医と相談し栄養補助食品(ラコール、エンチュア等)で補助している。寒天ゼリーやアイスクリーム、プリン等のカロリーの高い食品を食べてもらう事もある。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	献立に偏りがなく配慮しているが、定期的な話し合いは行えていない。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食材の賞味期限や状態を確認し使用しており、調理器具の衛生管理にも気を付けている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	△	口腔ケアの必要性や重要性の理解に努めているが、全ての職員に浸透しているとはいえない。	/	/	/	以前は、協力歯科医の訪問があり、研修を受けたり、アドバイスや指導をもらったりすることができ、職員への口腔ケアの重要性の理解促進に努めていたものの、コロナ禍において、指導を受ける機会は減少している。また、毎食後、職員は声をかけて、利用者は洗面台で歯磨きなどの口腔ケアを実施するとともに、必要に応じて、職員は見守りやできない部分のサポートをしている。中には、自分で歯磨きができる利用者があるほか、口腔内の様子を見られることを拒む利用者もあり、週1回程度、全ての利用者の口腔内の様子を確認して把握を行い、異常が見られた場合には、早期に歯科受診へ繋げられることを期待したい。さらに、義歯は夕食後に預かり、毎日消毒液に浸けて、清潔保持に努めている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	自分で口腔ケアをされる方は確認ができていない。また、拒否が強い方も十分に確認がとれていない。	/	/	△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	不定期で協力歯科医から研修を受けているが、きちんと活かすことができていない。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	自分で行える方は声掛けに対応し、自分で行えない方は職員が行っている。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	食後に声掛けを行い、必要に応じ誘導や介助にて支援している。だが、拒否が強い方や行為が自立されている方の口腔内のチェックは不十分である。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	△	理解しているが、おむつ使用による心身へのダメージまでは深く理解できていない。	/	/	/	利用者の高齢化や重度化に伴い、ほとんどの利用者は、紙パンツやおむつを使用している。中には、職員がチェック表等で排泄パターンを把握して、こまめな声かけやトイレ誘導を行うことにより、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。また、夜間のみ、ポータブルトイレを使用している利用者もいる。さらに、排泄状況に応じて、パッドや紙パンツなどの使用する場合には、職員間で適切な排泄用品の使用等を話し合うとともに、家族に連絡の上で使用している。加えて、水分摂取や腹部マッサージ、軟便剤の服用、体操などを取り入れて、職員は利用者が自然排便が行えるよう支援するとともに、5日間排便が行われない場合には、医師からの指示で、看護師が浣腸の対応をすることもある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	△	一般常識の範囲程度に止まっている職員も多く、きちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	一人ひとりの排泄状況をチェック表を用いて、おおよその排泄パターンを把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	△	トイレで用が足せるよう、一人ひとりの状態に合わせてパットやオムツを選択しているが、必要性や適切性についての見直しはきちんとできていない。	◎	/	○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	本人の状態によって、動作や方法考え改善できるように努めている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	チェック表を確認しながら、個々に合わせて声掛けや誘導を行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	おむつ類は必要性が現れた場合に、家族さんへ連絡し相談の上で使用している。使用するものも、家族さんが用意される事もあるが、施設側で用意することが多く好みでの選択はできていない。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	本人の排泄状況や排泄量に合わせて使用している。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	水分摂取を促したり、腹部マッサージや散歩等を行い工夫してはいるが、全ての方にてできているとは言えず十分ではない。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	時間帯や曜日などは職員が決めており、拒否される方や本人が入浴を希望された場合は、できる限り希望に沿うよう努めている。	◎	/	○	週3回午前中の時間帯を活用して、利用者は入浴することができる。ユニット毎に、月・水・金曜日、火・木・土曜に分けて、職員は1日4～5名の利用者の入浴支援をしている。利用者の希望に応じて、湯の温度や湯船に浸かる時間などに、可能な範囲で柔軟に対応している。中には、入浴が好きな利用者もあり、体調面を確認しながら、ゆったりと会話をしながら、入浴を楽しむこともできている。また、季節に応じて、ゆず湯にしたり、入浴剤を入れるなど、リラックスして入浴ができるよう工夫している。中には、入浴を拒む利用者もあり、時間や日にちを替えて声かけするなど、納得してもらった上で、入浴をしてもらうことができている。さらに、西館ユニットの浴室には、リフト浴が設置されているものの、現在は使用しておらず、重度な利用者には、職員が2人体制で、安心安全な入浴支援に努めている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	体調に注意しながら、ゆっくりと入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	本人にできる事はしてもらい、不十分であったりできない事は声掛けや介助を行っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	入浴を拒む方に対しては、声掛けや方法を工夫したり日を変えたりしながら、本人が納得して入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、その日の体調に考慮しながら、必要に応じ再度バイタルチェックを行い日程調整を行っている。入浴後もしっかりと状態観察を行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	就寝や起床時間を個別に記録しており、把握できている。				入居前から、継続して眠剤を服薬している利用者もおり、毎夕には、管理者等からバイタル表等を取りまとめて、母体クリニックの医師等に利用者の状況の報告している。また、個別の施設介護支援経過表等で、職員は利用者一人ひとりの入眠状況を把握するとともに、利用者の生活リズムに合わせて、昼寝をしてもらうほか、夜間に眠れない場合には、ホール等に出て、職員と会話をしたり、お茶を飲んだりするなどの個別支援をしている。中には、夜中に大声で叫ぶ利用者があるものの、他の利用者はほとんど気づかず、夜間に良眠することができている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れない場合は、無理に休んでもらうのではなく、ホールや居室などが過ごしやすい場所ですラックスしてもらう工夫をしている。				
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠状態を確認しながら、主治医と相談し対応している。また、薬剤を使用する場合は使用する事での注意事項を確認し、状況報告をして相談している。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	一人ひとりの生活リズムに合わせて、必要に応じ心身を休める場をとれるよう心掛けている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	△	希望があれば、電話をしたり手紙のやり取りができるよう支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	×	意思疎通の難し方に対しては、促したり必要な手助けができていない。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	△	本人から希望があれば、可能な限り希望に沿えるようにしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	届いた手紙や葉書は本人に直接渡しており、本人から希望があれば返事を返せるよう支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	△	家族の状況に合わせて、理解や協力を願っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	理解しているが、本人がお金を所持する事での紛失や、いくらあったなかつたといったトラブルへの心配や関心が強い。				
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	日常的な買い物ができるおらず、協力を得る働きかけも行えてない。				
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	どうしても本人が少額でも持っていないと落ち着かない、といったケースがあれば、家族さんと相談しながら同意を得られた場合は行っている。				
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入居時に説明を行っている。				
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入居時に説明を行っており、同意を得ている。また、個別に出納帳を作成しており、毎月お手紙と一緒にコピーを送付している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	本人や家族さんの希望に沿って、外出や外泊、他科受診等の支援を行っている。	○		○	コロナ禍において、事業所には外出や面会の制限が設けられているものの、利用者や家族から、「お墓参りに行きたい」などの要望が出され、母体クリニックの医師に相談の上で、感染状況を見計らいながら、家族との外出対応を可能とするなど、可能な範囲で柔軟に対応をしている。また、利用者から出された食べ物や飲み物などの要望には、職員が買い出しに出かけて対応することもある。さらに、介護タクシーなどの外部サービスの対応もしている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	△	敷地内に建物が2つある為、家族さん以外の方が来所された時は、どちらか分らず訪ねて来られる事があり分かりにくい部分がある。	◎	×	○	事業所は幹線道路に面しており、周囲から見ても、分かりやすい場所に立地し、車でも来訪しやすい環境となっている。また、木々のほか、花壇には花を植えられ、家庭的な雰囲気も感じられる。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じ、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住みやすさの心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	△	共有空間に関しては、季節の花を飾ったり壁に季節感のあるものを飾る事もあるが、比較的簡単なイメージに落ち着いている。	○	○	○	建物は、平屋の西館と2階建ての東館に分かれて、南側の居室等には温かく明るい採光が差し込んでいる。また、食堂を兼ねるホール内は広く、テーブルやソファ等が置かれ、利用者は思い思いの場所でくつろぐことができる。さらに、西館のホール内には対面のカウンターキッチンがあり、職員は食事の盛り付け等を行いながら、利用者の状況を見渡せるようになっている。屋外には花壇もあり、利用者と一緒に花を植えたり、世話をしたりしている。ホール内の壁には、ユニット内の利用者の年齢や生年月日などの一覧が貼られている。加えて、毎朝職員が清掃や消毒を行うほか、定期的な換気も行うとともに、空気清浄機も設置され、快適な空間となっている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	毎朝、職員が掃除を行っており、ホール・トイレには芳香剤を置き臭いにも注意している。	○	○	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	外へ出て季節の移り変わりを感じてもらったり、ラジオ体操をしたり、季節の花を飾る等で居心地よく過ごせるよう努めている。	○	○	○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う人と過ごせるよう座席を工夫したり、居室やホールへの出入りを自由にしておらず配慮している。	○	○	○	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	△	本人の使い慣れたものを持ってきてもらっているが、個人によって差があり、必要なものだけになってしまっている場合もある。	○	○	○	居室には、ベッドやタンス、収納、エアコン、ナースコール等が備え付けられている。中には、一部分が畳敷きの部屋も完備されている。また、利用者はテレビなどの使い慣れた物や、仏壇や家族の写真などの持ち込んでいる利用者があるものの、収納スペースも確保され、シンブルに片付けられた居室も多い。さらに、職員が清掃や換気を行うとともに、南側の部屋には温かい日差しが入るほか、風通りも良く、快適な環境となっている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	△	日々の生活の中で、なるべく危険性を下げる配慮を行い、安全に行動できるようにしている。	○	○	○	事業所では、自分の部屋が認識しやすいように、分かりやすく名前の表札をかけるほか、飾り付けを行うなど、利用者が混乱しないような工夫をしている。また、認識をしにくい利用者には、職員が付き添い、誘導をしている。さらに、バリアフリー構造で、手すりが付けられているほか、車いす等で移動する利用者の動線も確保されている。
		b	利用者の活動意欲を醸成する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	物によっては、すぐに手の届かない所に置いてあることがあり、活動意欲を醸成までできていない。	○	○	○	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	△	全ての職員が理解し実行できているとはいえない。日中は基本玄関を施錠していないが、帰宅願望が強く不穏状態が続いている方がいたり業務に追われていると、一時的に玄関を施錠してしまう事もある。	×	×	△	職員は研修等で学び、玄関等に鍵をかけることの弊害の理解促進に努めている。日中には、玄関の施錠はしていないものの、コロナ禍において、インターホンを使用した対応をしている。建物は幹線道路に面していることもあり、以前に外出して利用者を探した経験もあることから、帰宅願望などの不穏状態が続く利用者がある場合には、玄関の施錠をすることもあつた。また、屋外に出たい利用者には、対応できる範囲で職員が付き添い、駐車場外気浴や散歩をするなどの対応をしている。さらに、夜間は防犯のため、19時から7時まで、玄関の施錠をしている。利用者家族等、地域アンケートから、コロナ禍もあり、鍵をかけないケアの取り組みに対して、家族等への十分な理解が得られていないことが窺えるため、施錠をする場合があることを家族へ伝えたり、コロナ禍において、インターホンで対応していることを伝えたりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	×	話し合いはできていない。	○	○	○	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	病歴や現病の把握に努めており、主治医から留意事項等についても指導してもらっている。	○	○	○	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、いつもと違う行動や変化がみられた場合は、個別に記録として残しており、必要に応じ申し送りや日誌等を使い早期発見に努めている。	○	○	○	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	きちんと医療連携ができており、24時間いつでも連絡が取れる状況にある。	○	○	○	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	母体が病院の為、基本的にはそちらで診てもらっているが、家族さんから希望がある場合は主治医へ報告し紹介状を書いてもらい、希望する医療機関へ受診してもらっている。	◎	○	○	
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	入居時に説明し、母体である病院の医師がかかりつけ医となっている。かかりつけ医とは、しっかりと連携が取れており、適切な医療を受けられるよう支援している。	○	○	○	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院方法は家族へ連絡し確認を取っている。受診結果の内容は家族さんから聴いたり、紹介状がある場合はその返事を確認する事で情報を共有している。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には、介護サマリーを作成している。必要に応じ電話連絡での情報提供もを行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	必要に応じ面会に行ったり、病院関係者に可能な範囲で状況を聴いている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	日頃の関わりの中で、変化があれば看護師や主治医へ報告し相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	母体が病院である為、いつでも連絡し相談できる体制となっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、変化があれば報告・相談し早期発見・治療に繋げている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	薬情等を確認しており、ある程度理解できている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	利用者ごとに朝・昼・夕・眠前と一色化されており、本人確認を行い服薬を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日頃からしっかりと確認を行い、変化があれば主治医へ報告し相談している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時に説明し確認をしている。また、状態に変化があれば状況に応じ主治医や家族と今後の事について話し合っている。				
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化における指針に基づいて、主治医・家族・職員で方針を共有し、同意を得ている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかを見極めを行っている。	○	把握に努め、必要に応じ主治医や看護師と話し合い、どこまでの支援ができるかを見極めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入居時や、重度化した場合等に、主治医・家族を含めた話し合いの中で、できる事・できない事の説明を行っている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	今後起こりうる変化については、主治医や看護師より説明を受けており、いつでも連絡できるよう調整している。変化があれば、家族さんへ報告を行い必要に応じ主治医とも話し合いを行っている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	△	相談があれば、話し合い支援を行っているが十分とはいえない。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	外部や内部での研修を通して学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	感染症マニュアルを作成し、いつでも閲覧できるようにしているが、日頃からの訓練まではできていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	市役所や包括からのメールで情報が送られてきているので、資料を職員が閲覧できるようにしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	手洗いは徹底しているが、うがいは十分とは言えない。また、流行時にはマスクの着用を促している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	△	関係づくりに努めているが、まだまだ十分とは言えない。				コロナ禍以前は、家族に事業所の夏祭りや秋祭り、クリスマス会、消防訓練などの行事への参加を呼びかけて、一部の家族から協力を得ることができていたものの、コロナ禍において、家族が参加できる行事案内は自粛している。また、感染状況を見計らいながら、ガラス越しの家族との面会に対応するとともに、条件付きで居室内での10分程度の面会に対応するなど、利用者や家族に喜ばれている。さらに、家族の来訪する機会が減少しており、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、意見や要望を聞くよう努めているほか、毎月の請求書の送付に併せて、「生活状況とお預り金の報告」などの手紙を送付して、利用者の近況を伝えている。2か月に1回つじい新聞を家族に送付して、事業所の出来事や様子を伝えているものの、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた出来事などが十分に家族に伝わっていないことが窺えるため、担当職員の交代を家族に報告したり、つじい新聞を活用して新人職員を紹介したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。加えて、利用者家族等アンケートには、ほとんどの家族の協力を得ることができている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	家族さんがホームでの活動に参加できるような場面や機会の提供はできていない。	×		△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たよりの発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等」)	○	毎月お手紙で、利用者さんの状況を報告し、状態が変化した時などはその都度報告している。	○		○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	本人と家族さんとの関係の理解に努めているが、より良い関係を築いていけるような支援はできていない。				
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	運営上の事柄や出来事については、新聞を作り送付している。	×		○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	必要に応じ、今後起こりうるリスクについて家族に説明を行っている。				
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	積極的な声掛けや連絡は行っていない。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	契約書を基に説明を行い同意を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居に関しては、家族さんと主治医を交え十分な話し合いを行い、納得してもらっている。退居先へスムーズに移れるよう必要な支援を行っている。				
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	事業所に目的や役割について、改めて説明する機会は作れていない。		○		コロナ禍において、外出や面会の制限が設けられており、地域と交流できる機会は激減しており、職員等が地域住民とであった場合には、挨拶を交わす程度に留まっている。コロナ禍以前は、地域の秋祭りに神輿が事業所に立ち寄り、亥の子などの行事に参加したりすることができていた。コロナ禍の収束後には、運営推進会議を活用して、地域との交流を話し合ったり、地域の公民館行事等に参加したり、法人内のグループホーム等の利用者や交流を図るなど、地域との交流が少しずつ活性化していくことを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	×	地方祭や亥の子等、参加できる行事には参加させてもらっている。日常的な挨拶や町内会・自治会への参加はできていない。コロナウイルス感染症の影響もあり、行事に参加する機会が減っている。		×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、見守りや支援してくれる地域の人を増やす機会が少なくできていない。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、気軽に立ち寄るには難しさがある。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもつらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	散歩に出かけた時等に挨拶を行う程度で、日常的な付き合いができていないとは言えない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	近隣住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図る事の支援や働きかけはできていない。				
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	×	消防との協力はできているが、他施設やスーパー・コンビニ等との関係を深める働きかけができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	コロナウイルス感染症の影響もあり、運営推進会議が出来ていない。	×	/	△	コロナ禍において、事業所では集合形式の運営推進会議は中止され、行政等への中止報告のみに留まっている。今後は、書面での会議開催を行い、事業所内の様子や出来事を取りまとめた資料やつじい新聞等を活用しながら、参加メンバーや家族に報告して意見をもらったり、オンライン機能を活用して会議を開催したりするなど、有意義な会議開催が行われることを期待したい。また、次の会議は、感染状況を見計らいながら、集合形式の会議開催を予定している。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	×	外部評価結果について、きちんと報告できていない。	/	×	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	テーマに合わせて参加メンバーや日程、時間帯について配慮や工夫ができていない。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	全ての職員が理念について共通認識を持ち、その理念が浸透しているとはいえない。	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	家族さんや地域の人たちに理念が十分に伝わっているとはいえず、伝える機会も少ない。	×	×	/	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	一人ひとりの実力とレベルの把握に努めていて、法人外の研修に関しては受けられるように改善されている。	/	/	/	医師である代表者は、月2回健診や往診等で事業所への来訪があり、利用者や職員と話しをする機会もある。また、コロナ禍以前は、法人内の他のグループホーム等と一緒に、年間計画を立てて、合同研修を行うことができていたものの、現在は法人・事業所として年間の研修計画を立てたオンライン配信の研修を職員が受講し、スキルアップに繋げている。外部研修にも参加できるように改善されたものの、コロナ禍において、ほとんど参加する機会はない状態となっている。さらに、職員が希望する勤務形態に対応したり、希望休や有給休暇の取得を促したり、管理者等が職員の相談に応じるなど、少しでも働きやすい職場環境づくりに努めている。以前は、ボーリング大会への参加や、職員の親睦会の開催などができていたものの、コロナ禍で開催が自粛されている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	計画的に取り組んでいるとはいえず、不十分な面もある。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	△	キャリアパスを取り入れ説明を行っているが、まだまだ浸透しているとはいえない。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	×	同業者と交流する機会が作れておらず、相互研修などの活動も行っていない。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	△	必要に応じて機会を設けているが、十分とは言えない。	/	/	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	虐待防止について研修会等を通して勉強し理解している。	/	/	○	オンライン配信の研修で、職員は高齢者虐待防止等を学んでいる。擦り傷などが見られた場合には、職員がヒヤリハット報告書を作成し、家族や医師に報告を行うほか、ユニットリーダー等を中心に話し合い、再発防止に努めている。さらに、不適切な言動が見られた場合には、職員同士で話し合うとともに、ユニットリーダー等に伝えて、該当職員へ注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	なるべく、いつでもケアについて話し合う機会が持てるよう心掛けている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	日々、職員とコミュニケーションを図り、疲労やストレスがないか注意を払っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	その都度、現場で話し合ったり、その時々状況が身体拘束に当たらないか検討している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設側の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	説明し理解してもらえよう努めている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	必要があれば地域包括支援センターや専門機関へ相談するよう努めているが、きちんとした連携体制ができていないといえない。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	緊急時のマニュアルを作成しており、職員へ周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	定期的な訓練は行えておらず、実践力が身についているとはいえない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告・ヒヤリハットについて、個々の事例について各ユニットで共有し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ミニカンファレンスや申し送り等を通して、個々のケースに対して話し合い事故防止に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応は、窓口として管理者が行っているが、全ての職員がきちんと理解し実行できているとはいえない。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情があった場合は速やかな対応に心掛け、必要に応じて市へ報告・相談している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	苦情内容を真摯に受け止め、速やかに対応するようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	△	十分な機会が作れているとはいえない、それを伝える機会も少ない。	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞き、可能な範囲で対応をしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めているほか、利用者の近況を記載した手紙等を送付する際には、要望があれば伝えてもらっている。また、管理者等は通常業務を職員と一緒に、日頃から声をかけて意見を聞いていることもあり、職員が食事の仕方などの提案が出された場合には、取り入れて対応することもある。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	×	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	代表者が自ら現場に足を運ぶ機会が少なく十分とは言えない。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				外部評価の自己評価は、職員に意見を出してもらい、ユニット毎にユニットリーダー等が取りまとめて作成をしている。また、ユニットリーダーを通して、サービスの評価結果を職員に伝え、目標達成に向けて取り組んでいる。今後、集合形式の運営推進会議の開催を予定しており、サービスの評価結果等の報告を予定している。利用者家族等、地域アンケート結果から、サービス評価の取組みに十分な理解が得られていないことが窺えるため、全ての家族へ外部評価の評価結果の良い点や次へのステップを期待されることなどの簡潔に分かりやすくまとめたものを送付したり、コロナ禍の収束後には家族の来訪時に、サービス評価の取組みの目的などを説明したり、目標達成の取組み状況などのモニターの協力を呼びかけるなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	実施できていない。	×	×	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	成果の確認ができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルを作成し、職員に周知している。	/	/	/	事業所では、各種災害マニュアルの作成をして職員に周知するとともに、年2回昼夜を想定した避難訓練を実施している。コロナ禍以前は、避難訓練に家族にも参加協力をしてもらうことができていた。また、非常災害時の対応や業務継続計画(BCP)をオンライン配信の研修等で学び、現在計画を作成している。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して、十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子を事業所内に掲載したり、家族や運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取組みが理解してもらえよう、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画している。	○	日中・夜間を想定して訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	△	消火設備等の点検は行っているが、まだまだ不十分である。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域住民の参加が難しく、他の事業所との連携も取れず、合同の訓練も行っていない。	×	×	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	地域の災害対策には殆ど参加できていない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域に向けた、広報活動や啓発活動ができていない。	/	/	/	法人と連携をしながら、地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。また、コロナ禍において、市行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加できる機会は減少しているものの、法人・事業所として、認知症行方不明者の捜索訓練に協力するなど、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	×	相談支援の取り組みは行っていない。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	活用できていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	実習の受け入れはできていない。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	地域包括支援センターの認知症行方不明者捜索の訓練に参加する程度で、十分に連携できているとは言えない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 11 月 2 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 24名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3873300283
事業所名	グループホームつじい
(ユニット名)	東館1階
記入者(管理者)	
氏名	中村 辰次
自己評価作成日	令和 4年 10月 16日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 私達のホームは入居者の皆様の個性を尊重し、地域と共存し、共に生活することを目指します。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ・自己評価を一般職を含めた全員で行う。 一般職も少しずつではあるが参加してもらっているが、まだ不十分である。 ・介護記録の書き方に関する研修等を通じてスキルアップを目指す。 職員によって書き方の内容に差があるので、研修の継続と個別の指導が必要。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 介護保険制度が施行されてから、まもない平成12年6月に開設され、23年目を迎える事業所は、市内中心部の幹線道路の面に立地している。近隣には、スーパーやコンビニエンスストアなどの店舗、交番、郵便局、市役所などが点在して、利便性が良いほか、事業所から、田園風景や石鎚山系の山々も眺めることができる。また、比較的近い場所に母体クリニックもあり、毎日の利用者のバイタル表等を取りまとめ、利用者の健康状態等を報告するほか、月2回程度、主治医が健診や往診で来訪して健康管理を行うとともに、24時間体制で訪問看護と併せて連携が取れ、利用者や家族、職員には安心感がある。事業所での看取り介護の支援を希望する利用者や家族も多い。さらに、コロナ禍において、外出や面会などの制限が設けられているものの、医師と相談して感染状況を見計らいながら、条件付きで家族と居室内での10分程度の面会に対応したり、家族と一緒にお墓参りに出かけたりできるよう支援するなど、利用者や家族から喜ばれている。コロナ禍を含めた課題は残るものの、管理者やユニットリーダーを中心に、レクリエーションやコミュニケーションを取り入れながら、利用者がゆったりと穏やかに楽しむある生活が送れるよう支援している。</p>
--	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	一人ひとりの思いや希望の把握に努め、できる限り本人の意向に添って生活が送れるようにしているが、現状では対応が困難な事もある。	○	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は思いや希望を聞き、フェイスシート等に記載をしている。また、日々の生活の中で、職員は利用者から思いや希望などを聞くほか、意思疎通が難しい利用者には、筆談を活用したり、表情や行動等から思いをくみ取りつつするよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	△	日々の生活での関わりの中で、本人の行動や表情から意向を把握できるよう努めているが、家族さんの意向や職員の意見が強くなる事がある。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	よく面会に来られる家族さんに対しては話し合う機会があるが、遠方であったり面会が難しい家族さんに対しては電話・手紙等でやり取りは行っているが、話し合いまではできていない。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	個別のケース記録を行っているが、細かな部分まできちんと記録ができていない事がある。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	職員間で話し合い留意しているが、どこまで本人の思いを汲みとれているかは判断が難しい。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	△	入居時に本人や家族さんから聴いており、必要に応じ面会時や電話等で把握できるよう心掛けているが、把握できる情報には個人差がある。	/	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は法人独自のアセスメントシート等を活用して、入居までの経過や生活履歴、日常生活の状況、介護の問題点などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、利用者から情報を聞き取るほか、電話連絡時に家族から情報を聞くこともある。さらに、遠方の家族や事業所に任せきりとなる家族もいるため、情報収集ができないことも多く、以前利用していた施設の関係者や介護支援専門員等から、少しでも多くの情報収集に努めている。加えて、把握した情報はアセスメントシート等に記載して、職員間で情報共有するとともに、3か月に1回の介護計画の見直しの際には、情報を更新している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	本人が現在できることを日々の生活の中で把握に努め、職員間で共有できることをしてもらっている。状況が変わった時には、その都度対応している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	ケース記録や業務日誌、申し送り等で情報を共有し、日々の変化を把握できるよう努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	△	ミニカンファレンス等で話し合いを行っているが、職員間での意見交換に止まってしまっている。	/	/	○	事前に、利用者や家族から意見を聞くほか、医師や薬剤師等から指示やアドバイスをもらっている。また、把握したアセスメント情報をもとに、3か月に1回ユニットリーダーを中心に、利用者の現状を確認して評価を行うほか、毎月実施するミニカンファレンスを活用して、ユニット毎に職員間でより良いサービスが提供できるよう検討をしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	検討した内容に基づいて、話し合いを行っている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人や家族さんの意向、職員の意見も踏まえ現状に合わせた介護計画を作成している。	/	/	/	事前に、利用者や家族、医師などの関係者から意見を聞くほか、アセスメント情報や職員の気づきシートを参考に、3か月に1回ケア行動計画・チェック表、施設介護支援経過表、バイタル表等を確認して評価を行うとともに、ミニカンファレンスを活用して職員間で話し合い、ユニットリーダーである計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、利用者や家族から出された意見を目標やサービス内容に反映された計画となるよう努めているものの、疎遠や「お任せします」という家族もあり、計画作成が難しい場合もある。さらに、「サービス担当者会議の要員に、話し合った内容が記載されているものの、コロナ禍において、外部から会議に参加していないと思われる参加者名の記載が見られるとともに、ほとんど変化が見られない場合は、前回と同じ内容の記録が残されているため、記録の記載方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	△	家族さんによっては職員にお任せになってしまっている事もあり、きちんと意見やアイデアが反映できているとは一概には言えない。	/	○	/	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の方でも居室ばかりで生活することがないように、できる限りホール等で過ごせる機会を作れるようプランを立てている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	職員にお任せになってしまっていたり、地域との協力体制等が難しくできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	△	介護計画の内容把握や理解が十分にできていないといえるが、職員間で共有できるよう努めているが伝わりきれていない。	/	/	/	ミニカンファレンスの中で、介護計画の内容を話し合っているほか、各ユニットにある事務室に個別のファイル置き、職員はいつでも目標やサービス内容を確認できるようになっている。また、介護計画のサービス内容が転記されたケア行動計画・チェック表に、実施状況を○×などの印を付けて、計画に沿って運動された記録を残すことができている。さらに、記録が日誌や施設介護支援経過表、バイタル表等の多岐に亘っているため、重複された記録を簡素化された様式の検討を行うなど、職員負担が少しでも軽減されることを期待したい。加えて、特記事項の欄に、分かりやすく色を変えながら、利用者の状態の変化や様子などが分かりやすいような記録を残すこともできている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	△	記録を行っているが、振り返りに関しては不十分な面がある。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	3ヶ月に1度見直しを行っている。また、本人の状態に変化が現れた時は、その都度見直しを行っている。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	△	状況に変化がみられない場合は、月1回の現状確認はできていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	△	状態に変化があった場合には、その都度見直しを行い新たに介護計画を作成しているが、家族等やその他の関係者等を上手く巻き込めていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的、緊急時とも、その日に出動している職員を中心に話し合いを行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらい、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	△	意見交換がし易いよう、一人ひとりに話を振ったり、気づきシートを使ってその場では発言し辛い職員からも意見を聴けるよう工夫している。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらい、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	できる限り多くの職員が参加できる日を決めて行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらい、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	△	日々の申し送りで十分に伝わっていなかったり、必要な情報が抜けている事があるので、十分とは言えない。	○	/	/	日々の職員の交代時には、業務日誌や個別のケース記録等を活用して、各ユニット毎に口頭で申し送りを行っている。また、職員は出勤時に業務日誌等の確認を行い、確認した日付とサインを残し、伝達漏れがないように努めている。さらに、毎日の夕方には、管理者等がバイタル表等を取りまとめ、母体クリニックに利用者の状況の報告して情報共有を行うとともに、健康管理に繋げている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	一人ひとりの「その日したいこと」の把握に努めているが、対応はできていない。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	可能な限り自身で決定できるよう支援している。意思決定が困難な利用者さんには、声掛けや本人の表情等から汲み取れるよう努めている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	可能な限り本人のペースに合わせて支援ができるよう努めているが、日々の業務に追われ疎かになっている事が多い。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	一人ひとりに合わせた声掛けを行い、ゆったりとした雰囲気づくりを心掛けている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や反応から少しでも本人の意向を汲み取れるよう心掛けている。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	△	言葉遣いや態度に気を付け行動しているが、全ての職員ができていないといえるが、配慮に欠けてしまっている事もある。	○	○	○	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーに意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	羞恥心やプライバシーに十分配慮し行動しているが、業務に追われていたりすると疎かになってしまう事がある。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	不必要な入室は避け、本人への声掛けを行い確認を取っている。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	全ての職員がきちんと理解して実行できているとはいえないが、プライバシー保護や個人情報保護について研修等で理解、遵守に努めている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	家事(掃除、洗濯、炊事等)で利用者を手伝ってもらう事もあり、その行為が終わったら感謝の気持ちを伝えるようにしている。				洗濯物たたみや食器拭き、掃除などを手伝ってもらった場合には、職員から利用者へ「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、世話好きの利用者もあり、励ましの声かけや車いすを押すなどのフォローをしたり、寝たきりなどの状態となった男性利用者へ、他の男性利用者が居室の入り口を開けて声をかけると、手を挙げて応えたりするなど、相互に助け合う場面も見られる。さらに、職員は利用者同士の関係性を把握し、気の合う利用者が近くに座れるように配席をするなどの考慮をしている。中には、不穏な利用者がテーブルをガタガタと動かし、言い合いなどのトラブルになりそうな場面も見られるものの、早期に職員が間に入り対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	職員が間に入り、見守りを行い利用者同士が支え合って暮らしていけるよう支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	座席の位置を工夫したり、見守りを行う中でトラブルになりそうな時は間に入り対応している。また、利用者同士の関係性の把握にも努めている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルを未然に防げるよう、必要な時は職員が間に入り場面を変えたり気分転換を図る等の配慮をしている。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入居時に話を聴き情報収集に努めているが、細かな人間関係までは把握できていない。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	友人・知人が会いに来られたり、家族さんが馴染みの場所へ連れて行ってくださる事はあるが、こちらから訪問することはできていない。コロナウイルスの影響で外出・面会が制限されている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	全ての人にはできておらず、職員の業務の都合に合わせてもらっていることが多い。また、外出が嫌いな方は1日室内で過ごされている。重度の方は、無理のない程度に日向ぼっこを行っている。又、コロナウイルスの影響で外出は出来ない。	×	×	△	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられており、天気の良い日には、屋外の駐車場に出て、外気浴やラジオ体操、簡単な散歩をしたり、花壇に花を植えたりするなど、職員は利用者も少しでも気分転換を図れるよう支援している。コロナ禍以前は、地域のイベントに参加したり、ドライブをしてコスモス畑などに出かけたりすることもできていた。また、重度な利用者も、同様に車いすを使用して屋外に出て外気浴をしたり、居室の中だけに留まることなく、リビング等で過ごしてもらったりするよう支援している。コロナ禍の収束後には、多くの外出支援が再開されることを期待したい。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	地域の人やボランティア等を活用しての外出支援はできていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	△	認知症やBPSDに対する理解を図っているが、認知症だけでなく精神疾患を患っているケースもあり、その時の気分によって上手くいった事も上手くいなくなる事もあり、対応が難しくなる事がある。				職員はオンライン配信の研修で学び、認知症状等の理解促進に努めている。6か月に1回、「改定長谷川式簡易知能評価スケール」を活用して検査を行い、利用者一人ひとりの認知度の進行具合等の確認をしている。中には、精神疾患を伴う利用者もあり、支援が難しい場面も見られるものの、医師に相談しながら対応している。また、ラジオ体操やマッサージ、パズル、ドミノ倒しなどを取り入れて、職員は利用者の心身機能の維持にも努めている。さらに、利用者自身で、できることやできそうなことは時間がかかっても自分でも自分で、できない部分のサポートや見守り、待つ介護を心がけた支援に努めているものの、時間がかかりすぎる場合には、つい手を出してしまうこともある。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	△	認知症によるものと疾患によるものとの区別がきちんとできていない職員もあり、適切な維持・向上が図れているとはいえない。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	なるべく、本人のできる事、できそうな事に対しては声掛けや一緒に行う事で維持に努めているが、つい手が出てしまう事がある。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	△	一人ひとりの有する力の把握に努めており、日々の生活の中からも新たな発見があれば、職員間で情報を共有している。				食事の際の後片づけや食器拭き、洗濯物干しやたたみ、掃除など、日々の生活の中で、利用者に役割を担ってもらい、職員と一緒にいけるよう支援している。中には、花壇の花の世話を楽しみにしている利用者もいる。また、利用者の高齢化や重度化に伴い、できる役割は減ってきている。さらに、職員は利用者の好きな話題などの声かけをしたり、パズルやドミノ倒し、カラオケ、作品づくりのレクリエーションを取り入れたりするなど、楽しみのある生活が送れるような支援に努めている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	一人ひとり役割や楽しみをもって生活が送れるよう支援している。だが、全ての方に対して役割や楽しみごとを作ることは難しく、上手くいかない事がある。	○	×	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	△	自分で選ぶことができる方は好みに合わせて身だしなみを整えてもらっている。だが、重度の方は職員が選ぶ事が多い。				毎朝、自分で着る服を選び、化粧水や椿油などを付けて、おしゃれを楽しんでいる利用者もいる。中には、職員が化粧などのおしゃれを支援することもあり、化粧品等の付ける順番を間違えると指摘する利用者もいる。また、自分で電気シェイバーを使用して髭剃りをする利用者もあり、職員は剃り残しなどのフォローをしている。さらに、衣服の乱れや汚れなどが見られた場合には、職員がさりげなくフォローをしたり、居室等へ移動して着替えてもらったりするなどの対応をしている。加えて、重度の利用者にも、可能な範囲で好みの服に着替えてもらうなどの支援に努めているものの、職員が服を選ばざるを得ない利用者も多くなってきている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるよう支援している。	△	家族さんの協力を得ながら、本人の好みの服装や持ち物で整えられるよう支援している。				
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定が難しい方には、声掛けや一緒に考える事で本人の気持ちに添えるよう努めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	季節に合った服装を心掛けているが、その人らしさの工夫はできていない。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくてさげすみがかかっている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣類の着方が間違っていたり汚れがみられたら、さりげなくフォローしている。だが、髭剃りは不十分な事がある。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	行きつけの理容・美容室へ行かれる方は殆どいない。ホームへ毎月第2金曜日に訪問があり、そちらを利用されている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	できる限り、本人らしさに気をつけた髪形や服装になるよう支援している。			○	
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の準備や片付け等、一緒にできる方と行き支援している。				
17	食事を楽しむことのできる支援	a	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	買い物や食材選びはできていないが、調理や後片付け等できる事は利用者と一緒にやっている。			△	以前は、職員が調理をしていたものの、事業所では利用者への支援を優先させるために、業者の管理栄養士が立てたバランスのよい献立の湯煎する食品を活用するとともに、ユニットで炊飯等を行い、盛り付けて利用者に食事を提供している。食事の準備や後片付け、食器拭きなど、できることを利用者へ手伝ってもらっている。アレルギーや苦手な物がある利用者の情報は、事前に業者に伝えて、代替品などを用意してもらうことができている。中には、パサパサなどの食べたい物をいう利用者もあり、コロナ禍以前は、ファミリーレストランなどに外出に出かけることができていたものの、現在は職員がスーパーなどに好きな物を買に行くなどの対応をすることもある。また、行事等の際には、季節に応じた業者の特別メニューを提供することもある。茶碗と箸、コップなどの食器類は、入居時に使い慣れた物を持参してもらったほか、利用者の状態に合わせて、事業所で用意した使い慣れた物を使用している。食事の際に、同じ食卓を囲み、同じ物や職員が用意した弁当などを一緒に摂るよう努めているものの、居室等での食事やサポートを必要とする利用者も増えてきており、時間をずらして食べることも多くなっている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで盛り付け等をしていることもあり、利用者は食事の匂いが漂うとともに、献立を利用者に伝えながら、食事の雰囲気や味を伝えるよう努めている。加えて、管理者等が業者に要望を伝えることもある。
		b	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できる事は一緒になって行うよう掛け、行った後は必ず感謝の気持ちを伝えるようにしている。				
		c	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居時に嗜好の有無を確認しており、入居後も好きな物、嫌いなものがあれば職員間で情報を共有している。				
		d	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいの悪いもの等を取り入れている。	○	なるべく季節感を感じられる献立や食材を使うよう心掛けている。ひじきや切り干し大根など、昔からよく食べられている食材も取り入れるようにしている。利用者・家族さんから好き嫌いの有無を確認している。			○	
		e	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしい盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	一人ひとりの嚥下状態に合わせて、主治医、職員間で相談しながら食形態を決めている。				
		f	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	なるべく本人の使い慣れたものを使用するよう努めている。また、本人の身体機能に合わせて、軽いものや割れにくいものを選択するようにしている。			○	
		g	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	なるべく一緒に食卓を囲んで一緒に食事をしよう努めているが、食事介助をしなればいけない利用者もいて同じ時間に食べる事ができない事が多い。			○	
		h	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	△	利用者の方が過ごすホールで調理を行っており、献立を伝えたり調理中の音やにおい等で雰囲気づくりに配慮している。		○	○	
		i	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	十分な食事が摂取できるように努めている。水分は、1200mlを目標として、飲み物や飲み方を工夫している。				
		j	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	食事の摂取量が少なかったり十分ではない場合は、主治医と相談し栄養補助食品(ラコール、エンチュア等)で補助している。寒天ゼリーやアイスクリーム、プリン等のカロリーの高い食品を食べてもらう事もある。				
		k	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	献立に偏りがなく配慮しているが、定期的な話し合いは行えていない。			○	
l	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食材の賞味期限や状態を確認し使用しており、調理器具の衛生管理にも気を付けている。						

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	△	口腔ケアの必要性や重要性の理解に努めているが、全ての職員に浸透しているとはいえない。	/	/	/	以前は、協力歯科医の訪問があり、研修を受けたり、アドバイスや指導をもらったりすることができ、職員への口腔ケアの重要性の理解促進に努めていたものの、コロナ禍において、指導を受ける機会は減少している。また、毎食後、職員は声をかけて、利用者は洗面台で歯磨きなどの口腔ケアを実施するとともに、必要に応じて、職員は見守りやできない部分のサポートをしている。中には、自分で歯磨きができる利用者があるほか、口腔内の様子を見られることを拒む利用者もあり、週1回程度、全ての利用者の口腔内の様子を確認して把握を行い、異常が見られた場合には、早期に歯科受診へ繋げられることを期待したい。さらに、義歯は夕食後に預かり、毎日消毒液に浸けて、清潔保持に努めている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	自分で口腔ケアをされる方は確認ができていない。また、拒否が強い方も十分に確認がとれていない。	/	/	△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	不定期で協力歯科医から研修を受けているが、きちんと活かすことができていない。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	自分で行える方は声掛けに対応し、自分で行えない方は職員が行っている。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	食後に声掛けを行い、必要に応じ誘導や介助にて支援している。だが、拒否が強い方や行為が自立されている方の口腔内のチェックは不十分である。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	△	理解しているが、おむつ使用による心身へのダメージまでは深く理解できていない。	/	/	/	利用者の高齢化や重度化に伴い、ほとんどの利用者は、紙パンツやおむつを使用している。中には、職員がチェック表等で排泄パターンを把握して、こまめな声かけやトイレ誘導を行うことにより、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。また、夜間のみ、ポータブルトイレを使用している利用者もいる。さらに、排泄状況に応じて、パッドや紙パンツなどの使用する場合には、職員間で適切な排泄用品の使用等話し合うとともに、家族に連絡の上で使用している。加えて、水分摂取や腹部マッサージ、軟便剤の服用、体操などを取り入れて、職員は利用者が自然排便が行えるよう支援するとともに、5日間排便が行われない場合には、医師からの指示で、看護師が浣腸の対応をすることもある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	△	一般常識の範囲程度に止まっている職員も多く、きちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	一人ひとりの排泄状況をチェック表を用いて、おおよその排泄パターンを把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	△	トイレで用が足せるよう、一人ひとりの状態に合わせてパットやオムツを選択しているが、必要性や適切性についての見直しはきちんとできていない。	◎	/	○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	本人の状態によって、動作や方法考え改善できるように努めている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	チェック表を確認しながら、個々に合わせて声掛けや誘導を行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	おむつ類は必要性が現れた場合に、家族さんへ連絡し相談の上使用している。使用するものも、家族さんが用意される事もあるが、施設側で用意することが多く好みでの選択はできていない。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	本人の排泄状況や排泄量に合わせて使用している。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	水分摂取を促したり、腹部マッサージや散歩等を行い工夫してはいるが、全ての方にてできているとは言えず十分ではない。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	時間帯や曜日などは職員が決めており、拒否される方や本人が入浴を希望された場合は、できる限り希望に沿うよう努めている。	◎	/	○	週3回午前中の時間帯を活用して、利用者は入浴することができる。ユニット毎に、月・水・金曜と、火・木・土曜に分けて、職員は1日4～5名の利用者の入浴支援をしている。利用者の希望に応じて、湯の温度や湯船に浸かる時間などに、可能な範囲で柔軟に対応している。中には、入浴が好きな利用者もあり、体調面を確認しながら、ゆったりと会話をしながら、入浴を楽しむこともできている。また、季節に応じて、ゆず湯にしたり、入浴剤を入れるなど、リラックスして入浴ができるよう工夫している。中には、入浴を拒む利用者もあり、時間や日にちを替えて声かけするなど、納得してもらった上で、入浴をしてもらうことができている。さらに、西館ユニットの浴室には、リフト浴が設置されているものの、現在は使用しておらず、重度な利用者には、職員が2人体制で、安心安全な入浴支援に努めている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	体調に注意しながら、ゆっくりと入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	本人にできる事はしてもらい、不十分であったりできない事は声掛けや介助を行っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	入浴を拒む方に対しては、声掛けや方法を工夫したり日を変えたりしながら、本人が納得して入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、その日の体調に考慮しながら、必要に応じ再度バイタルチェックを行い日程調整を行っている。入浴後もしっかりと状態観察を行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	就寝や起床時間を個別に記録しており、把握できている。				入居前から、継続して眠剤を服薬している利用者もおり、毎夕には、管理者等からバイタル表等を取りまとめて、母体クリニックの医師等に利用者の状況の報告している。また、個別の施設介護支援経過表等で、職員は利用者一人ひとりの入眠状況を把握するとともに、利用者の生活リズムに合わせて、昼寝をしてもらうほか、夜間に眠れない場合には、ホール等に出て、職員と会話をしたり、お茶を飲んだりするなどの個別支援をしている。中には、夜中に大声で叫ぶ利用者があるものの、他の利用者はほとんど気づかず、夜間に良眠することができている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れない場合は、無理に休んでもらうのではなく、ホールや居室などが過ごしやすい場所ですラックスしてもらう工夫をしている。				
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠状態を確認しながら、主治医と相談し対応している。また、薬剤を使用する場合は使用する事での注意事項を確認し、状況報告をして相談している。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	一人ひとりの生活リズムに合わせて、必要に応じ心身を休める場をとれるよう心掛けている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	△	希望があれば、電話をしたり手紙のやり取りができるよう支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	×	意思疎通の難し方に対しては、促したり必要な手助けができていない。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	△	本人から希望があれば、可能な限り希望に沿えるようにしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	届いた手紙や葉書は本人に直接渡しており、本人から希望があれば返事を返せるよう支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	△	家族の状況に合わせて、理解や協力を願っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	理解してはいるが、本人がお金を所持する事での紛失や、いくらあったなかつたといったトラブルへの心配や関心が強い。				
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	日常的な買い物ができるおらず、協力を得る働きかけも行えてない。				
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	どうしても本人が少額でも持っていないと落ち着かない、といったケースがあれば、家族さんと相談しながら同意を得られた場合は行っている。				
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入居時に説明を行っている。				
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入居時に説明を行っており、同意を得ている。また、個別に出納帳を作成しており、毎月お手紙と一緒にコピーを送付している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	本人や家族さんの希望に沿って、外出や外泊、他科受診等の支援を行っている。	○		○	コロナ禍において、事業所には外出や面会の制限が設けられているものの、利用者や家族から、「お墓参りに行きたい」などの要望が出され、母体クリニックの医師に相談の上で、感染状況を見計らいながら、家族との外出対応を可能とするなど、可能な範囲で柔軟に対応をしている。また、利用者から出された食べ物や飲み物などの要望には、職員が買い出しに出かけて対応することもある。さらに、介護タクシーなどの外部サービスの対応もしている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	△	敷地内に建物が2つある為、家族さん以外の方が来所された時は、どちらか分からず訪ねて来られる事があり分かりにくい部分がある。	◎	×	○	事業所は幹線道路に面しており、周囲から見ても、分かりやすい場所に立地し、車でも来訪しやすい環境となっている。また、木々のほか、花壇には花を植えられ、家庭的な雰囲気も感じられる。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じ、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	△	共有空間に関しては、季節の花を飾ったり壁に季節感のあるものを飾る事もあるが、比較的簡単なイメージに落ち着いている。	○	○	○	建物は、平屋の西館と2階建ての東館に分かれて、南側の居室等には温かく明るい採光が差し込んでいる。また、食堂を兼ねるホール内は広く、テーブルやソファ等が置かれ、利用者は思い思いの場所でくつろぐことができる。さらに、西館のホール内には対面のカウンターキッチンがあり、職員は食事の盛り付け等を行いながら、利用者の状況を見渡せるようになっている。屋外には花壇もあり、利用者と一緒に花を植えたり、世話をしたりしている。ホール内の壁には、ユニット内の利用者の年齢や生年月日などの一覧が貼られている。加えて、毎朝職員が清掃や消毒を行うほか、定期的な換気も行うとともに、空気清浄機も設置され、快適な空間となっている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	△	毎朝、職員が掃除を行っており、ホール・トイレには芳香剤を置き臭いにも注意している。	/	/	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	外へ出て季節の移り変わりを感じてもらったり、ラジオ体操をしたり、季節の花を飾る等で居心地よく過ごせるよう努めている。	/	/	○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う人と過ごせるよう座席を工夫したり、居室やホールへの出入りを自由にしておらず配慮している。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	△	本人の使い慣れたものを持ってきてもらっているが、個人によって差があり、必要なものだけになってしまっている場合もある。	○	/	○	居室には、ベッドやタンス、収納、エアコン、ナースコール等が備え付けられている。中には、一部分が畳敷きの部屋も完備されている。また、利用者はテレビなどの使い慣れた物や、仏壇や家族の写真などの持ち込んでいる利用者があるものの、収納スペースも確保され、シンブルに片付けられた居室も多い。さらに、職員が清掃や換気を行うとともに、南側の部屋には温かい日差しが入るほか、風通りも良く、快適な環境となっている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	△	日々の生活の中で、なるべく危険性を下げる配慮を行い、安全に行動できるようにしている。	/	/	○	事業所では、自分の部屋が認識しやすいように、分かりやすく名前の表札をかけるほか、飾り付けを行うなど、利用者が混乱しないような工夫をしている。また、認識をしにくい利用者には、職員が付き添い、誘導をしている。さらに、バリアフリー構造で、手すりが付けられているほか、車いす等で移動する利用者の動線も確保されている。
		b	利用者の活動意欲を醸成する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	物によっては、すぐに手の届かない所に置いてあることがあり、活動意欲を醸成までできていない。	/	/	/	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	△	全ての職員が理解し実行できているとはいえない。日中は基本玄関を施錠していないが、帰宅願望が強く不穏状態が続いている方がいたり業務に追われていると、一時的に玄関を施錠してしまう事もある。	×	×	△	職員は研修等で学び、玄関等に鍵をかけることの弊害の理解促進に努めている。日中には、玄関の施錠はしていないものの、コロナ禍において、インターホンを使用した対応をしている。建物は幹線道路に面していることもあり、以前に外出して利用者を探した経験もあることから、帰宅願望などの不穏状態が続く利用者がある場合には、玄関の施錠をすることもあつた。また、屋外に出たい利用者には、対応できる範囲で職員が付き添い、駐車場外気浴や散歩をするなどの対応をしている。さらに、夜間は防犯のため、19時から7時まで、玄関の施錠をしている。利用者家族等、地域アンケートから、コロナ禍もあり、鍵をかけないケアの取り組みに対して、家族等への十分な理解が得られていないことが窺えるため、施錠をする場合があることを家族へ伝えたり、コロナ禍において、インターホンで対応していることを伝えたりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	×	話し合いはできていない。	/	/	/	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	病歴や現病の把握に努めており、主治医から留意事項等についても指導してもらっている。	/	/	/	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、いつもと違う行動や変化がみられた場合は、個別に記録として残しており、必要に応じ申し送りや日誌等を使い早期発見に努めている。	/	/	/	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	きちんと医療連携ができており、24時間いつでも連絡が取れる状況にある。	/	/	/	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	母体が病院の為、基本的にはそちらで診てもらっているが、家族さんから希望がある場合は主治医へ報告し紹介状を書いてもらい、希望する医療機関へ受診してもらっている。	◎	/	/	
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	入居時に説明し、母体である病院の医師がかかりつけ医となっている。かかりつけ医とは、しっかりと連携が取れており、適切な医療を受けられるよう支援している。	/	/	/	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院方法は家族へ連絡し確認を取っている。受診結果の内容は家族さんから聴いたり、紹介状がある場合はその返事を確認する事で情報を共有している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には、介護サマリーを作成している。必要に応じ電話連絡での情報提供も行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	必要に応じ面会に行ったり、病院関係者に可能な範囲で状況を聴いている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	日頃の関わりの中で、変化があれば看護師や主治医へ報告し相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	母体が病院である為、いつでも連絡し相談できる体制となっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできる体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、変化があれば報告・相談し早期発見・治療に繋げている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	薬情等を確認しており、ある程度理解できている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	利用者ごとに朝・昼・夕・眠前と一色化されており、本人確認を行い服薬を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日頃からしっかりと確認を行い、変化があれば主治医へ報告し相談している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時に説明し確認をしている。また、状態に変化があれば状況に応じ主治医や家族と今後の事について話し合っている。				事業所には、「重度化した場合における対応および看取りに関する指針」があり、入居時に家族等へ説明して意思確認を行うとともに、終末期などの段階に応じて、再度、意思確認をしている。また、利用者の状態の変化に応じて、家族や主治医、職員を交えて話し合い、方針を共有している。さらに、毎日の夕方には、管理者等がバイタル表等を取りまとめ、母体クリニックに利用者の状況の報告して情報共有を行い、健康管理に繋げるとともに、24時間体制で訪問看護を合わせて連携が取れており、利用者や家族、職員には安心感がある。加えて、看取り希望の利用者や家族も多く、多くの看取り支援を経験している。職員には不安があるものの、看取り介護等の研修を実施するとともに、緊急時には看護師や医師に連絡できるようにしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化における指針に基づいて、主治医・家族・職員で方針を共有し、同意を得ている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかを見極めを行っている。	○	把握に努め、必要に応じ主治医や看護師と話し合い、どこまでの支援ができるかを見極めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入居時や、重度化した場合等に、主治医・家族を含めた話し合いの中で、できる事・できない事の説明を行っている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	今後起こりうる変化については、主治医や看護師より説明を受けており、いつでも連絡できるよう調整している。変化があれば、家族さんへ報告を行い必要に応じ主治医とも話し合いを行っている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	△	相談があれば、話し合い支援を行っているが十分とはいえない。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	外部や内部での研修を通して学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	感染症マニュアルを作成し、いつでも閲覧できるようにしているが、日頃からの訓練まではできていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	市役所や包括からのメールで情報が送られてきているので、資料を職員が閲覧できるようにしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	手洗いは徹底しているが、うがいは十分とは言えない。また、流行時にはマスクの着用を促している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	△	関係づくりに努めているが、まだまだ十分とは言えない。				コロナ禍以前は、家族に事業所の夏祭りや秋祭り、クリスマス会、消防訓練などの行事への参加を呼びかけて、一部の家族から協力を得ることができていたものの、コロナ禍において、家族が参加できる行事案内は自粛している。また、感染状況を見計らいながら、ガラス越しの家族との面会に対応するとともに、条件付きで居室内での10分程度の面会に対応するなど、利用者や家族に喜ばれている。さらに、家族の来訪する機会が減少しており、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、意見や要望を聞くよう努めているほか、毎月の請求書の送付に併せて、「生活状況とお預り金の報告」などの手紙を送付して、利用者の近況を伝えている。2か月に1回つじい新聞を家族に送付して、事業所の出来事や様子を伝えているものの、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた出来事などが十分に家族に伝わっていないことが窺えるため、担当職員の交代を家族に報告したり、つじい新聞を活用して新人職員を紹介したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。加えて、利用者家族等アンケートには、ほとんどの家族の協力を得ることができている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	家族さんがホームでの活動に参加できるような場面や機会の提供はできていない。	×		△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎月お手紙で、利用者さんの状況を報告し、状態が変化した時などはその都度報告している。	○		○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	本人と家族さんとの関係の理解に努めているが、より良い関係を築いていけるような支援はできていない。				
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	運営上の事柄や出来事については、新聞を作り送付している。	×		○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	必要に応じ、今後起こりうるリスクについて家族に説明を行っている。				
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	積極的な声掛けや連絡は行っていない。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	契約書を基に説明を行い同意を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居に関しては、家族さんと主治医を交え十分な話し合いを行い、納得してもらっている。退居先へスムーズに移れるよう必要な支援を行っている。				
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	事業所に目的や役割について、改めて説明する機会は作れていない。		○		
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	×	地方祭や亥の子等、参加できる行事には参加させてもらっている。日常的な挨拶や町内会・自治会への参加はできていない。コロナウイルス感染症の影響もあり、行事に参加する機会が減っている。		×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、見守りや支援してくれる地域の人を増やす機会が少なくできていない。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、気軽に立ち寄りには難しさがある。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りしてもらったりなど、日常的なおつきあいをしている。	×	散歩に出かけた時等に挨拶を行う程度で、日常的な付き合いができていないとは言えない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	近隣住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図る事の支援や働きかけはできていない。				
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	×	消防との協力はできているが、他施設やスーパー・コンビニ等との関係を深める働きかけができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	コロナウイルス感染症の影響もあり、運営推進会議が出来ていない。	×	/	△	コロナ禍において、事業所では集合形式の運営推進会議は中止され、行政等への中止報告のみに留まっている。今後は、書面での会議開催を行い、事業所内の様子や出来事を取りまとめた資料やつじい新聞等を活用しながら、参加メンバーや家族に報告して意見をもらったり、オンライン機能を活用して会議を開催したりするなど、有意義な会議開催が行われることを期待したい。また、次回の会議は、感染状況を見計らいながら、集合形式の会議開催を予定している。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	×	外部評価結果について、きちんと報告できていない。	/	×	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	テーマに合わせて参加メンバーや日程、時間帯について配慮や工夫ができていない。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	全ての職員が理念について共通認識を持ち、その理念が浸透しているとはいえない。	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	家族さんや地域の人たちに理念が十分に伝わっているとはいえず、伝える機会も少ない。	×	×	/	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	一人ひとりの実力とレベルの把握に努めていて、法人外の研修に関しては受けられるように改善されている。	/	/	/	/
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	計画的に取り組んでいるとはいえず、不十分な面もある。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	△	キャリアパスを取り入れ説明を行っているが、まだまだ浸透しているとはいえない。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	×	同業者と交流する機会が作れておらず、相互研修などの活動も行っていない。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	△	必要に応じて機会を設けているが、十分とは言えない。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	虐待防止について研修会等を通して勉強し理解している。	/	/	○	オンライン配信の研修で、職員は高齢者虐待防止等を学んでいる。擦り傷などが見られた場合には、職員がヒヤリハット報告書を作成し、家族や医師に報告を行うほか、ユニットリーダー等を中心に話し合い、再発防止に努めている。さらに、不適切な言動が見られた場合には、職員同士で話し合うとともに、ユニットリーダー等に伝えて、該当職員へ注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	なるべく、いつでもケアについて話し合う機会が持てるよう心掛けている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	日々、職員とコミュニケーションを図り、疲労やストレスがないか注意を払っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	その都度、現場で話し合ったり、その時々状況が身体拘束に当たらないか検討している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設側の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	説明し理解してもらえよう努めている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	必要があれば地域包括支援センターや専門機関へ相談するよう努めているが、きちんとした連携体制ができていないといえない。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	緊急時のマニュアルを作成しており、職員へ周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	定期的な訓練は行えておらず、実践力が身についていないといえない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告・ヒヤリハットについて、個々の事例について各ユニットで共有し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ミニカンファレンスや申し送り等を通して、個々のケースに対して話し合い事故防止に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応は、窓口として管理者が行っているが、全ての職員がきちんと理解し実行できているとはいえない。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情があった場合は速やかな対応に心掛け、必要に応じて市へ報告・相談している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	苦情内容を真摯に受け止め、速やかに対応するようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	△	十分な機会が作れているとはいえない、それを伝える機会も少ない。	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞き、可能な範囲で対応をしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めているほか、利用者の近況を記載した手紙等を送付する際には、要望があれば伝えてもらっている。また、管理者等は通常業務を職員と一緒に、日頃から声をかけて意見を聞いていることもあり、職員が食事の仕方などの提案が出された場合には、取り入れて対応することもある。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	×	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	代表者が自ら現場に足を運ぶ機会が少なく十分とは言えない。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				外部評価の自己評価は、職員に意見を出してもらい、ユニット毎にユニットリーダー等が取りまとめ作成をしている。また、ユニットリーダーを通して、サービスの評価結果を職員に伝え、目標達成に向けて取り組んでいる。今後、集合形式の運営推進会議の開催を予定しており、サービスの評価結果等の報告を予定している。利用者家族等、地域アンケート結果から、サービス評価の取組みに十分な理解が得られていないことが窺えるため、全ての家族へ外部評価の評価結果の良い点や次へのステップを期待されることなどの簡潔に分かりやすくまとめたものを送付したり、コロナ禍の収束後には家族の来訪時に、サービス評価の取組みの目的などを説明したり、目標達成の取組み状況などのモニターの協力を呼びかけるなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	実施できていない。	×	×	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	成果の確認ができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルを作成し、職員に周知している。	/	/	/	事業所では、各種災害マニュアルの作成をして職員に周知するとともに、年2回昼夜を想定した避難訓練を実施している。コロナ禍以前は、避難訓練に家族にも参加協力をしてもらうことができていた。また、非常災害時の対応や業務継続計画(BCP)をオンライン配信の研修等で学び、現在計画を作成している。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して、十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲載したり、家族や運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取組みが理解してもらえよう、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	日中・夜間を想定して訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	△	消火設備等の点検は行っているが、まだまだ不十分である。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域住民の参加が難しく、他の事業所との連携も取れず、合同の訓練も行っていない。	×	×	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	地域の災害対策には殆ど参加できていない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域に向けた、広報活動や啓発活動ができていない。	/	/	/	法人と連携をしながら、地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。また、コロナ禍において、市行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加できる機会は減少しているものの、法人・事業所として、認知症行方不明者の捜索訓練に協力するなど、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	×	相談支援の取り組みは行っていない。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	活用できていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	実習の受け入れはできていない。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	地域包括支援センターの認知症行方不明者捜索の訓練に参加する程度で、十分に連携できているとは言えない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 11 月 2 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 24名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3873300283
事業所名	グループホームつじい
(ユニット名)	東館2階
記入者(管理者)	
氏名	村上 浩一
自己評価作成日	令和 4年 10月 16日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 私達のホームは入居者の皆様の個性を尊重し、地域と共存し、共に生活することを目指します。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ・自己評価を一般職を含めた全員で行う。 一般職も少しずつではあるが参加してもらっているが、まだ不十分である。 ・介護記録の書き方に関する研修等を通じてスキルアップを目指す。 職員によって書き方の内容に差があるので、研修の継続と個別の指導が必要。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 介護保険制度が施行されてから、まもない平成12年6月に開設され、23年目を迎える事業所は、市内中心部の幹線道路の面に立地している。近隣には、スーパーやコンビニエンスストアなどの店舗、交番、郵便局、市役所などが点在して、利便性が良いほか、事業所から、田園風景や石鎚山系の山々も眺めることができる。また、比較的近い場所に母体クリニックもあり、毎日の利用者のバイタル表等を取りまとめ、利用者の健康状態等を報告するほか、月2回程度、主治医が健診や往診で来訪して健康管理を行うとともに、24時間体制で訪問看護と併せて連携が取れ、利用者や家族、職員には安心感がある。事業所での看取り介護の支援を希望する利用者や家族も多い。さらに、コロナ禍において、外出や面会などの制限が設けられているものの、医師と相談して感染状況を見計らいながら、条件付きで家族と居室内での10分程度の面会に対応したり、家族と一緒にお墓参りに出かけたりできるよう支援するなど、利用者や家族から喜ばれている。コロナ禍を含めた課題は残るものの、管理者やユニットリーダーを中心に、レクリエーションやコミュニケーションを取り入れながら、利用者がゆったりと穏やかに楽しむある生活が送れるよう支援している。</p>
--	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	一人ひとりの思いや希望の把握に努め、できる限り本人の意向に添って生活が送れるようにしているが、現状では対応が困難な事もある。	○	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は思いや希望を聞き、フェイスシート等に記載をしている。また、日々の生活の中で、職員は利用者から思いや希望などを聞くほか、意思疎通が難しい利用者には、筆談を活用したり、表情や行動等から思いをくみ取りつつするよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	△	日々の生活での関わりの中で、本人の行動や表情から意向を把握できるよう努めているが、家族さんの意向や職員の意見が強くなる事がある。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	よく面会に来られる家族さんに対しては話し合う機会があるが、遠方であったり面会が難しい家族さんに対しては電話・手紙等でやり取りは行っているが、話し合いまではできていない。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	個別のケース記録を行っているが、細かな部分まできちんと記録ができていない事がある。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	職員間で話し合い留意しているが、どこまで本人の思いを汲みとれているかは判断が難しい。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	△	入居時に本人や家族さんから聴いており、必要に応じ面会時や電話等で把握できるよう心掛けているが、把握できる情報には個人差がある。	/	/	○	入居前に、利用者や家族に事業所に来所してもらい、ユニットリーダー等は法人独自のアセスメントシート等を活用して、入居までの経過や生活履歴、日常生活の状況、介護の問題点などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、利用者から情報を聞き取るほか、電話連絡時に家族から情報を聞くこともある。さらに、遠方の家族や事業所に任せきりとなる家族もいるため、情報収集ができないことも多く、以前利用していた施設の関係者や介護支援専門員等から、少しでも多くの情報収集に努めている。加えて、把握した情報はアセスメントシート等に記載して、職員間で情報共有するとともに、3か月に1回の介護計画の見直しの際には、情報を更新している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	本人が現在できることを日々の生活の中で把握に努め、職員間で共有できることをしてもらっている。状況が変わった時には、その都度対応している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	ケース記録や業務日誌、申し送り等で情報を共有し、日々の変化を把握できるよう努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	△	ミニカンファレンス等で話し合いを行っているが、職員間での意見交換に止まってしまっている。	/	/	○	事前に、利用者や家族から意見を聞くほか、医師や薬剤師等から指示やアドバイスをもらっている。また、把握したアセスメント情報をもとに、3か月に1回ユニットリーダーを中心に、利用者の現状を確認して評価を行うほか、毎月実施するミニカンファレンスを活用して、ユニット毎に職員間でより良いサービスが提供できるよう検討をしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	検討した内容に基づいて、話し合いを行っている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人や家族さんの意向、職員の意見も踏まえ現状に合わせた介護計画を作成している。	/	/	/	事前に、利用者や家族、医師などの関係者から意見を聞くほか、アセスメント情報や職員の気づきシートを参考にして、3か月に1回ケア行動計画・チェック表、施設介護支援経過表、バイタル表等を確認して評価を行うとともに、ミニカンファレンスを活用して職員間で話し合い、ユニットリーダーである計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、利用者や家族から出された意見を目標やサービス内容に反映された計画となるよう努めているものの、疎遠や「お任せします」という家族もあり、計画作成が難しい場合もある。さらに、「サービス担当者会議の要員に、話し合った内容が記載されているものの、コロナ禍において、外部から会議に参加していないと思われる参加者名の記載が見られるとともに、ほとんど変化が見られない場合は、前回と同じ内容の記録が残されているため、記録の記載方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	△	家族さんによっては職員にお任せになってしまっている事もあり、きちんと意見やアイデアが反映できているとは一概には言えない。	/	○	/	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の方でも居室ばかりで生活することがないように、できる限りホール等で過ごせる機会を作れるようプランを立てている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	職員にお任せになってしまっていたり、地域との協力体制等が難しくできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	△	介護計画の内容把握や理解が十分にできていないといえるが、職員間で共有できよう努めているが伝わりきれていない。	/	/	/	ミニカンファレンスの中で、介護計画の内容を話し合っているほか、各ユニットにある事務室に個別のファイル置き、職員はいつでも目標やサービス内容を確認できるようになっている。また、介護計画のサービス内容が転記されたケア行動計画・チェック表に、実施状況を○×などの印を付けて、計画に沿って運動された記録を残すことができている。さらに、記録が日誌や施設介護支援経過表、バイタル表等の多岐に亘っているため、重複された記録を簡素化された様式の検討を行うなど、職員負担が少しでも軽減されることを期待したい。加えて、特記事項の欄に、分かりやすく色を変えながら、利用者の状態の変化や様子などが分かりやすいような記録を残すこともできている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	△	記録を行っているが、振り返りに関しては不十分な面がある。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	3ヶ月に1度見直しを行っている。また、本人の状態に変化が現れた時は、その都度見直しを行っている。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	△	状況に変化がみられない場合は、月1回の現状確認はできていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	△	状態に変化があった場合には、その都度見直しを行い新たに介護計画を作成しているが、家族等やその他の関係者等を上手く巻き込めていない。	/	/	/	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、ユニットリーダーを中心に、3か月に1回、ケア行動計画・チェック表や施設介護支援経過表等を確認して、利用者の現状確認や評価をしている。さらに、利用者の入退院や状態の変化が見られた場合には、その都度現状に即した介護計画の見直しをしている。
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的、緊急時とも、その日に出動している職員を中心に話し合いを行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	△	意見交換がしやすいよう、一人ひとりに話を振ったり、気づきシートを使ってその場では発言し辛い職員からも意見を聴けるよう工夫している。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	できる限り多くの職員が参加できる日を決めて行っている。	/	/	/	ユニット毎に、月1回ミニカンファレンスをユニットリーダーとその日の出勤職員で実施し、利用者の現状確認するとともに、話し合いをしている。また、参加できない職員には、事前に気づきシートを提出してもらったほか、話し合われた内容を申し送り時等に伝達している。今後は、職員が参加しやすい日程等の調整を行い、ユニットの全ての職員が参加したユニット会等が開催されるとともに、ミニカンファレンスで話し合われた内容の会議録等の作成を行い、確実な情報伝達が行われることを期待したい。さらに、緊急案件のある場合には、その日の出勤職員で話し合いをしている。
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	△	日々の申し送りで十分に伝わっていかず、必要な情報が抜けている事があるので、十分とは言えない。	○	/	/	日々の職員の交代時には、業務日誌や個別のケース記録等を活用して、各ユニット毎に口頭で申し送りを行っている。また、職員は出勤時に業務日誌等の確認を行い、確認した日付とサインを残し、伝達漏れがないように努めている。さらに、毎日の夕方には、管理者等がバイタル表等を取りまとめ、母体クリニックに利用者の状況の報告して情報共有を行うとともに、健康管理に繋げている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	一人ひとりの「その日したいこと」の把握に努めているが、対応はできていない。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	可能な限り自身で決定できるよう支援している。意思決定が困難な利用者さんには、声掛けや本人の表情等から汲み取れるよう努めている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	可能な限り本人のペースに合わせて支援ができるよう努めているが、日々の業務に追われ疎かになっている事が多い。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	一人ひとりに合わせた声掛けを行い、ゆったりとした雰囲気づくりを心掛けている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や反応から少しでも本人の意向を汲み取れるよう心掛けている。	/	/	/	お茶やコーヒーなどの飲み物、入浴後の着る服など、職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえよう支援している。また、意思疎通の難しい利用者にも、職員は筆談などのコミュニケーション手段を工夫するほか、ちょっとしたあいさつや声かけを行い、少しでも自己決定してもらえるような機会を作っている。加えて、職員は利用者がつったりと生活が送れるよう心がけて声をかけたり、レクリエーションなどを取り入れ、少しでも楽しみのある生活が送れるよう支援している。
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	△	言葉遣いや態度に気を付け行動しているが、全ての職員ができていないといえるが、配慮に欠けてしまっている事もある。	○	○	○	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーに意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	羞恥心やプライバシーに十分配慮し行動しているが、業務に追われていたりすると疎かになってしまう事がある。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーに意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	不必要な入室は避け、本人への声掛けを行い確認を取っている。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーに意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	全ての職員がきちんと理解して実行できているとはいえないが、プライバシー保護や個人情報保護について研修等で理解、遵守に努めている。	/	/	/	法人・事業所として、オンライン配信での研修を毎月実施しており、倫理及び法令順守、プライバシー保護等を職員は学び、理解促進に努めている。時には、馴れ馴れしい言葉づかいや態度も見られるため、管理者等は該当職員へ指導している。また、入浴や排泄の介助時には、職員は利用者の羞恥心やプライバシーに意識した対応に努めている。さらに、居室の入室時には、職員が利用者へ声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に声をかけて確認した上で、入室することができている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	家事(掃除、洗濯、炊事等)で利用者を手伝ってもらう事もあり、その行為が終わったら感謝の気持ちを伝えるようにしている。				洗濯物たたみや食器拭き、掃除などを手伝ってもらった場合には、職員から利用者へ「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、世話好きの利用者もあり、励ましの声かけや車いすを押すなどのフォローをしたり、寝たきりなどの状態となった男性利用者へ、他の男性利用者が居室の入り口を開けて声をかけると、手を挙げて応えたりするなど、相互に助け合う場面も見られる。さらに、職員は利用者同士の関係性を把握し、気の合う利用者が近くに座れるように配席をするなどの考慮をしている。中には、不穏な利用者がテーブルをガタガタと動かし、言い合いなどのトラブルになりそうな場面も見られるものの、早期に職員が間に入り対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	職員が間に入り、見守りを行い利用者同士が支え合って暮らしていけるよう支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	座席の位置を工夫したり、見守りを行う中でトラブルになりそうな時は間に入り対応している。また、利用者同士の関係性の把握にも努めている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルを未然に防げるよう、必要な時は職員が間に入り場面を変えたり気分転換を図る等の配慮をしている。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入居時に話を聴き情報収集に努めているが、細かな人間関係までは把握できていない。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	友人・知人が会いに来られたり、家族さんが馴染みの場所へ連れて行ってくれる事はあるが、こちらから訪問することはできていない。コロナウイルスの影響で外出・面会が制限されている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	全ての人にはできておらず、職員の業務の都合に合わせてもらっていることが多い。また、外出が嫌いな方は1日室内で過ごされている。重度の方は、無理のない程度に日向ぼっこを行っている。又、コロナウイルスの影響で外出は出来ない。	×	×	△	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられており、天気の良い日には、屋外の駐車場に出て、外気浴やラジオ体操、簡単な散歩をしたり、花壇に花を植えたりするなど、職員は利用者も少しでも気分転換を図れるよう支援している。コロナ禍以前は、地域のイベントに参加したり、ドライブをしてコスモス畑などに出かけたりすることもできていた。また、重度な利用者も、同様に車いすを使用して屋外に出て外気浴をしたり、居室の中だけに留まることなく、リビング等で過ごしてもらったりするよう支援している。コロナ禍の収束後には、多くの外出支援が再開されることを期待したい。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	地域の人やボランティア等を活用しての外出支援はできていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	×	認知症やBPSDに対する理解を図っているが、認知症だけでなく精神疾患を患っているケースもあり、その時の気分によって上手くいった事も上手くいかなかった事もあり、対応が難しくなる事がある。				職員はオンライン配信の研修で学び、認知症等の理解促進に努めている。6か月に1回、「改定長谷川式簡易知能評価スケール」を活用して検査を行い、利用者一人ひとりの認知度の進行具合等の確認をしている。中には、精神疾患を伴う利用者もあり、支援が難しい場面も見られるものの、医師に相談しながら対応している。また、ラジオ体操やマッサージ、パズル、ドミノ倒しなどを取り入れて、職員は利用者の心身機能の維持にも努めている。さらに、利用者自身で、できることやできそうなことは時間がかかっても自分でも自分でできる部分のサポートや見守り、待つ介護を心がけた支援に努めているものの、時間がかかりすぎる場合には、つい手を出してしまうこともある。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	△	認知症によるものと疾患によるものとの区別がきちんとできていない職員もあり、適切な維持・向上が図れているとはいえない。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	なるべく、本人のできる事、できそうな事に対しては声掛けや一緒に行う事で維持に努めているが、つい手が出てしまう事がある。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	△	一人ひとりの有する力の把握に努めており、日々の生活の中からも新たな発見があれば、職員間で情報を共有している。				食事の際の後片づけや食器拭き、洗濯物干しやたたみ、掃除など、日々の生活の中で、利用者に役割を担ってもらい、職員と一緒にいけるよう支援している。中には、花壇の花の世話を楽しみにしている利用者もいる。また、利用者の高齢化や重度化に伴い、できる役割は減ってきている。さらに、職員は利用者の好きな話題などの声かけをしたり、パズルやドミノ倒し、カラオケ、作品づくりのレクリエーションを取り入れたりするなど、楽しみのある生活が送れるような支援に努めている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	一人ひとり役割や楽しみをもって生活が送れるよう支援している。だが、全ての方に対して役割や楽しみごとを作ることは難しく、上手くいかない事がある。	○	×	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	△	自分で選ぶことができる方は好みに合わせて身だしなみを整えてもらっている。だが、重度の方は職員が選ぶ事が多い。				毎朝、自分で着る服を選び、化粧水や椿油などを付けて、おしゃれを楽しんでいる利用者もいる。中には、職員が化粧などのおしゃれを支援することもあり、化粧品等の付ける順番を間違えると指摘する利用者もいる。また、自分で電気シェイバーを使用して髭剃りをする利用者もあり、職員は剃り残しなどのフォローをしている。さらに、衣服の乱れや汚れなどが見られた場合には、職員がさりげなくフォローをしたり、居室等へ移動して着替えてもらったりするなどの対応をしている。加えて、重度の利用者にも、可能な範囲で好みの服に着替えてもらうなどの支援に努めているものの、職員が服を選ばざるを得ない利用者も多くなってきている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるよう支援している。	△	家族さんの協力を得ながら、本人の好みの服装や持ち物で整えられるよう支援している。				
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定が難しい方には、声掛けや一緒に考える事で本人の気持ちに添えるよう努めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	季節に合った服装を心掛けているが、その人らしさの工夫はできていない。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくてさげすみがかかっている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣類の着方が間違っていたり汚れがみられたら、さりげなくフォローしている。だが、髭剃りは不十分な事がある。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	行きつけの理容・美容室へ行かれる方は殆どいない。ホームへ毎月第2金曜日に訪問があり、そちらを利用されている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	できる限り、本人らしさに気をつけた髪形や服装になるよう支援している。			○	
		h	職員の髪型や化粧は清潔で、身だしなみに気を配っている。	○	清潔な髪型や化粧を心がけている。				
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の準備や片付け等、一緒にできる方と行い支援している。				以前は、職員が調理をしていたものの、事業所では利用者への支援を優先させるために、業者の管理栄養士が立てたバランスのよい献立の湯煎する食品を活用するとともに、ユニットで炊飯等を行い、盛り付けて利用者に食事を提供している。食事の準備や後片づけ、食器拭きなど、できることを利用者へ手伝ってもらっている。アレルギーや苦手な物がある利用者の情報は、事前に業者に伝えて、代替品などを用意してもらうことができている。中には、パサパサなどの食べたい物をいう利用者もあり、コロナ禍以前は、ファミリーレストランなどに外出に出かけることができていたものの、現在は職員がスーパーなどに好きな物を買に行くなどの対応をすることもある。また、行事等の際には、季節に応じた業者の特別メニューを提供することもある。茶碗と箸、コップなどの食器類は、入居時に使い慣れた物を持参してもらったほか、利用者の状態に合わせて、事業所で用意した使い慣れた物を使用している。食事の際に、同じ食卓を囲み、同じ物や職員が用意した弁当などを一緒に摂るよう努めているものの、居室等での食事やサポートを必要とする利用者も増えてきており、時間をずらして食べることも多くなっている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで盛り付け等をしていることもあり、利用者は食事の匂いが漂うとともに、献立を利用者に伝えながら、食事の雰囲気を楽しめるよう努めている。加えて、管理者等が業者に要望を伝えることもある。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	買い物や食材選びはできていないが、調理や後片付け等できる事は利用者と一緒にやっている。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できる事は一緒になって行うよう心掛け、行った後は必ず感謝の気持ちを伝えるようにしている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居時に嗜好の有無を確認しており、入居後も好きな物、嫌いなものがあれば職員間で情報を共有している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのよいもの等を取り入れている。	○	なるべく季節感を感じられる献立や食材を使うよう心掛けている。ひじきや切り干し大根など、昔からよく食べられている食材も取り入れるようにしている。利用者・家族さんから好き嫌いの有無を確認している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしい盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	一人ひとりの嚥下状態に合わせて、主治医、職員間で相談しながら食形態を決めている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	なるべく本人の使い慣れたものを使用するよう努めている。また、本人の身体機能に合わせて、軽いものや割れにくいものを選択するようにしている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	なるべく一緒に食卓を囲んで一緒に食事をしよう努めているが、食事介助をしなければいけない利用者もいて同じ時間に食べる事ができない事が多い。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	△	利用者の方が過ごすホールで調理を行っており、献立を伝えたり調理中の音やにおい等で雰囲気づくりに配慮している。		○	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	十分な食事が摂取できるように努めている。水分は、1200mlを目標として、飲み物や飲み方を工夫している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	食事の摂取量が少なかったり十分ではない場合は、主治医と相談し栄養補助食品(ラコール、エンチュア等)で補助している。寒天ゼリーやアイスクリーム、プリン等のカロリーの高い食品を食べてもらう事もある。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	×	献立に偏りがなく配慮しているが、定期的な話し合いは行っていない。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食材の賞味期限や状態を確認し使用しており、調理器具の衛生管理にも気を付けている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	△	口腔ケアの必要性や重要性の理解に努めているが、全ての職員に浸透しているとはいえない。	/	/	/	以前は、協力歯科医の訪問があり、研修を受けたり、アドバイスや指導をもらったりすることができ、職員への口腔ケアの重要性の理解促進に努めていたものの、コロナ禍において、指導を受ける機会は減少している。また、毎食後、職員は声をかけて、利用者は洗面台で歯磨きなどの口腔ケアを実施するとともに、必要に応じて、職員は見守りやできない部分のサポートをしている。中には、自分で歯磨きができる利用者があるほか、口腔内の様子を見られることを拒む利用者もあり、週1回程度、全ての利用者の口腔内の様子を確認して把握を行い、異常が見られた場合には、早期に歯科受診へ繋げられることを期待したい。さらに、義歯は夕食後に預かり、毎日消毒液に浸けて、清潔保持に努めている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	自分で口腔ケアをされる方は確認ができていない。また、拒否が強い方も十分に確認がとれていない。	/	/	△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	不定期で協力歯科医から研修を受けているが、きちんと活かすことができていない。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	自分で行える方は声掛けに対応し、自分で行えない方は職員が行っている。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	食後に声掛けを行い、必要に応じ誘導や介助にて支援している。だが、拒否が強い方や行為が自立されている方の口腔内のチェックは不十分である。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	△	理解しているが、おむつ使用による心身へのダメージまでは深く理解できていない。	/	/	/	利用者の高齢化や重度化に伴い、ほとんどの利用者は、紙パンツやおむつを使用している。中には、職員がチェック表等で排泄パターンを把握して、こまめな声かけやトイレ誘導を行うことにより、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。また、夜間のみ、ポータブルトイレを使用している利用者もいる。さらに、排泄状況に応じて、パッドや紙パンツなどの使用する場合には、職員間で適切な排泄用品の使用等を話し合うとともに、家族に連絡の上で使用している。加えて、水分摂取や腹部マッサージ、軟便剤の服用、体操などを取り入れて、職員は利用者が自然排便が行えるよう支援するとともに、5日間排便が行われない場合には、医師からの指示で、看護師が浣腸の対応をすることもある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	△	一般常識の範囲程度に止まっている職員も多く、きちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	一人ひとりの排泄状況をチェック表を用いて、おおよその排泄パターンを把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	△	トイレで用が足せるよう、一人ひとりの状態に合わせてパットやオムツを選択しているが、必要性や適切性についての見直しはきちんとできていない。	◎	/	○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	本人の状態によって、動作や方法考え改善できるように努めている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	チェック表を確認しながら、個々に合わせて声掛けや誘導を行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	おむつ類は必要性が現れた場合に、家族さんへ連絡し相談の上で使用している。使用するものも、家族さんが用意される事もあるが、施設側で用意することが多く好みでの選択はできていない。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	本人の排泄状況や排泄量に合わせて使用している。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	水分摂取を促したり、腹部マッサージや散歩等を行い工夫してはいるが、全ての方にできていないとは言えず十分ではない。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	時間帯や曜日などは職員が決めており、拒否される方や本人が入浴を希望された場合は、できる限り希望に沿うよう努めている。	◎	/	○	週3回午前中の時間帯を活用して、利用者は入浴することができる。ユニット毎に、月・水・金曜日、火・木・土曜に分けて、職員は1日4～5名の利用者の入浴支援をしている。利用者の希望に応じて、湯の温度や湯船に浸かる時間などに、可能な範囲で柔軟に対応している。中には、入浴が好きな利用者もあり、体調面を確認しながら、ゆったりと会話をしながら、入浴を楽しむこともできている。また、季節に応じて、ゆず湯にしたり、入浴剤を入れるなど、リラックスして入浴ができるよう工夫もしている。中には、入浴を拒む利用者もあり、時間や日にちを替えて声かけするなど、納得してもらった上で、入浴をしてもらうことができている。さらに、西館ユニットの浴室には、リフト浴が設置されているものの、現在は使用しておらず、重度な利用者には、職員が2人体制で、安心安全な入浴支援に努めている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	○	体調に注意しながら、ゆっくりと入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	本人にできる事はしてもらい、不十分であったりできない事は声掛けや介助を行っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	入浴を拒む方に対しては、声掛けや方法を工夫したり日を変えたりしながら、本人が納得して入浴できるよう支援している。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、その日の体調に考慮しながら、必要に応じ再度バイタルチェックを行い日程調整を行っている。入浴後もしっかりと状態観察を行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	就寝や起床時間を個別に記録しており、把握できている。				入居前から、継続して眠剤を服薬している利用者もおり、毎夕には、管理者等からバイタル表等を取りまとめて、母体クリニックの医師等に利用者の状況の報告している。また、個別の施設介護支援経過表等で、職員は利用者一人ひとりの入眠状況を把握するとともに、利用者の生活リズムに合わせて、昼寝をしてもらうほか、夜間に眠れない場合には、ホール等に出て、職員と会話をしたり、お茶を飲んだりするなどの個別支援をしている。中には、夜中に大声で叫ぶ利用者があるものの、他の利用者はほとんど気づかず、夜間に良眠することができている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れない場合は、無理に休んでもらうのではなく、ホールや居室などが過ごしやすい場所ですラックスしてもらう工夫をしている。				
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠状態を確認しながら、主治医と相談し対応している。また、薬剤を使用する場合は使用する事での注意事項を確認し、状況報告をして相談している。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	一人ひとりの生活リズムに合わせて、必要に応じ心身を休める場をとれるよう心掛けている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	△	希望があれば、電話をしたり手紙のやり取りができるよう支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	×	意思疎通の難し方に対しては、促したり必要な手助けができていない。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	△	本人から希望があれば、可能な限り希望に沿えるようにしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	届いた手紙や葉書は本人に直接渡しており、本人から希望があれば返事を返せるよう支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	△	家族の状況に合わせて、理解や協力を願っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	理解してはいるが、本人がお金を所持する事での紛失や、いくらあったなかつたといったトラブルへの心配や関心が強い。				
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	日常的な買い物ができるおらず、協力を得る働きかけも行えてない。				
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	どうしても本人が少額でも持っていないと落ち着かない、といったケースがあれば、家族さんと相談しながら同意を得られた場合は行っている。				
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入居時に説明を行っている。				
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入居時に説明を行っており、同意を得ている。また、個別に出納帳を作成しており、毎月お手紙と一緒にコピーを送付している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	本人や家族さんの希望に沿って、外出や外泊、他科受診等の支援を行っている。	○		○	コロナ禍において、事業所には外出や面会の制限が設けられているものの、利用者や家族から、「お墓参りに行きたい」などの要望が出され、母体クリニックの医師に相談の上で、感染状況を見計らいながら、家族との外出対応を可能とするなど、可能な範囲で柔軟に対応をしている。また、利用者から出された食べ物や飲み物などの要望には、職員が買い出しに出かけて対応することもある。さらに、介護タクシーなどの外部サービスの対応もしている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	△	敷地内に建物が2つある為、家族さん以外の方が来所された時は、どちらか分からず訪ねて来られる事があり分かりにくい部分がある。	◎	×	○	事業所は幹線道路に面しており、周囲から見ても、分かりやすい場所に立地し、車でも来訪しやすい環境となっている。また、木々のほか、花壇には花を植えられ、家庭的な雰囲気も感じられる。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じ、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	△	共有空間に関しては、季節の花を飾ったり壁に季節感のあるものを飾る事もあるが、比較的簡単なイメージに落ち着いている。	○	○	○	建物は、平屋の西館と2階建ての東館に分かれて、南側の居室等には温かく明るい採光が差し込んでいる。また、食堂を兼ねるホール内は広く、テーブルやソファ等が置かれ、利用者は思い思いの場所でくつろぐことができる。さらに、西館のホール内には対面のカウンターキッチンがあり、職員は食事の盛り付け等を行いながら、利用者の状況を見渡せるようになっている。屋外には花壇もあり、利用者と一緒に花を植えたり、世話をしたりしている。ホール内の壁には、ユニット内の利用者の年齢や生年月日などの一覧が貼られている。加えて、毎朝職員が清掃や消毒を行うほか、定期的な換気も行うとともに、空気清浄機も設置され、快適な空間となっている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	毎朝、職員が掃除を行っており、ホール・トイレには芳香剤を置き臭いにも注意している。	○	○	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	外へ出て季節の移り変わりを感じてもらったり、ラジオ体操をしたり、季節の花を飾る等で居心地よく過ごせるよう努めている。	○	○	○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う人と過ごせるよう座席を工夫したり、居室やホールへの出入りを自由にしておらず配慮している。	○	○	○	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	△	本人の使い慣れたものを持ってきてもらっているが、個人によって差があり、必要なものだけになってしまっている場合もある。	○	○	○	居室には、ベッドやタンス、収納、エアコン、ナースコール等が備え付けられている。中には、一部分が畳敷きの部屋も完備されている。また、利用者はテレビなどの使い慣れた物や、仏壇や家族の写真などの持ち込んでいる利用者がいるものの、収納スペースも確保され、シンブルに片付けられた居室も多い。さらに、職員が清掃や換気を行うとともに、南側の部屋には温かい日差しが入るほか、風通しも良く、快適な環境となっている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	△	日々の生活の中で、なるべく危険性を下げる配慮を行い、安全に行動できるようにしている。	○	○	○	事業所では、自分の部屋が認識しやすいように、分かりやすく名前の表札をかけるほか、飾り付けを行うなど、利用者が混乱しないような工夫をしている。また、認識をしにくい利用者には、職員が付き添い、誘導をしている。さらに、バリアフリー構造で、手すりが付けられているほか、車いす等で移動する利用者の動線も確保されている。
		b	利用者の活動意欲を醸成する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	物によっては、すぐに手の届かない所に置いてあることがあり、活動意欲を醸成までできていない。	○	○	○	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	△	全ての職員が理解し実行できているとはいえない。日中は基本玄関を施錠していないが、帰宅願望が強く不穏状態が続いている方がいたり業務に追われていると、一時的に玄関を施錠してしまう事もある。	×	×	△	職員は研修等で学び、玄関等に鍵をかけることの弊害の理解促進に努めている。日中には、玄関の施錠はしていないものの、コロナ禍において、インターホンを使用した対応をしている。建物は幹線道路に面していることもあり、以前に外出して利用者を探した経験もあることから、帰宅願望などの不穏状態が続く利用者には、玄関の施錠をすることもできる。また、屋外に出たい利用者には、対応できる範囲で職員が付き添い、駐車場外気浴や散歩をするなどの対応をしている。さらに、夜間は防犯のため、19時から7時まで、玄関の施錠をしている。利用者家族等、地域アンケートから、コロナ禍もあり、鍵をかけないケアの取り組みに対して、家族等への十分な理解が得られていないことが窺えるため、施錠をする場合があることを家族へ伝えたり、コロナ禍において、インターホンで対応していることを伝えたりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	×	話し合いはできていない。	○	○	○	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	病歴や現病の把握に努めており、主治医から留意事項等についても指導してもらっている。	○	○	○	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、いつもと違う行動や変化がみられた場合は、個別に記録として残しており、必要に応じ申し送りや日誌等を使い早期発見に努めている。	○	○	○	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	きちんと医療連携ができており、24時間いつでも連絡が取れる状況にある。	○	○	○	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	母体が病院の為、基本的にはそちらで診てもらっているが、家族さんから希望がある場合は主治医へ報告し紹介状を書いてもらい、希望する医療機関へ受診してもらっている。	◎	○	○	
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所との関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	入居時に説明し、母体である病院の医師がかかりつけ医となっている。かかりつけ医とは、しっかりと連携が取れており、適切な医療を受けられるよう支援している。	○	○	○	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院方法は家族へ連絡し確認を取っている。受診結果の内容は家族さんから聴いたり、紹介状がある場合はその返事を確認する事で情報を共有している。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には、介護サマリーを作成している。必要に応じ電話連絡での情報提供も行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	必要に応じ面会に行ったり、病院関係者に可能な範囲で状況を聴いている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	日頃の関わりの中で、変化があれば看護師や主治医へ報告し相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	母体が病院である為、いつでも連絡し相談できる体制となっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできる体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	毎朝、バイタルチェックを行っており、変化があれば報告・相談し早期発見・治療に繋げている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	薬情等を確認しており、ある程度理解できている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	利用者ごとに朝・昼・夕・眠前と一色化されており、本人確認を行い服薬を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	日頃からしっかりと確認を行い、変化があれば主治医へ報告し相談している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時に説明し確認をしている。また、状態に変化があれば状況に応じ主治医や家族と今後の事について話し合っている。				事業所には、「重度化した場合における対応および看取りに関する指針」があり、入居時に家族等へ説明して意思確認を行うとともに、終末期などの段階に応じて、再度、意思確認をしている。また、利用者の状態の変化に応じて、家族や主治医、職員を交えて話し合い、方針を共有している。さらに、毎日の夕方には、管理者等がバイタル表等を取りまとめ、母体クリニックに利用者の状況の報告して情報共有を行い、健康管理に繋げるとともに、24時間体制で訪問看護を合わせて連携が取れており、利用者や家族、職員には安心感がある。加えて、看取り希望の利用者や家族も多く、多くの看取り支援を経験している。職員には不安があるものの、看取り介護等の研修を実施するとともに、緊急時には看護師や医師に連絡できるようにしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化における指針に基づいて、主治医・家族・職員で方針を共有し、同意を得ている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかを見極めを行っている。	○	把握に努め、必要に応じ主治医や看護師と話し合い、どこまでの支援ができるかを見極めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入居時や、重度化した場合等に、主治医・家族を含めた話し合いの中で、できる事・できない事の説明を行っている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	今後起こりうる変化については、主治医や看護師より説明を受けており、いつでも連絡できるよう調整している。変化があれば、家族さんへ報告を行い必要に応じ主治医とも話し合いを行っている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	△	相談があれば、話し合い支援を行っているが十分とはいえない。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	外部や内部での研修を通して学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	感染症マニュアルを作成し、いつでも閲覧できるようにしているが、日頃からの訓練まではできていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	市役所や包括からのメールで情報が送られてきているので、資料を職員が閲覧できるようにしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	手洗いは徹底しているが、うがいは十分とは言えない。また、流行時にはマスクの着用を促している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	△	関係づくりに努めているが、まだまだ十分とは言えない。				コロナ禍以前は、家族に事業所の夏祭りや秋祭り、クリスマス会、消防訓練などの行事への参加を呼びかけて、一部の家族から協力を得ることができていたものの、コロナ禍において、家族が参加できる行事案内は自粛している。また、感染状況を見計らいながら、ガラス越しの家族との面会に対応するとともに、条件付きで居室内での10分程度の面会に対応するなど、利用者や家族に喜ばれている。さらに、家族の来訪する機会が減少しており、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えて、意見や要望を聞くよう努めているほか、毎月の請求書の送付に併せて、「生活状況とお預り金の報告」などの手紙を送付して、利用者の近況を伝えている。2か月に1回つじい新聞を家族に送付して、事業所の出来事や様子を伝えているものの、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた出来事などが十分に家族に伝わっていないことが窺えるため、担当職員の交代を家族に報告したり、つじい新聞を活用して新人職員を紹介したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。加えて、利用者家族等アンケートには、ほとんどの家族の協力を得ることができている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	家族さんがホームでの活動に参加できるような場面や機会の提供はできていない。	×		△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	毎月お手紙で、利用者さんの状況を報告し、状態が変化した時などはその都度報告している。	○		○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	本人と家族さんとの関係の理解に努めているが、より良い関係を築いていけるような支援はできていない。				
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	運営上の事柄や出来事については、新聞を作り送付している。	×		○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	必要に応じ、今後起こりうるリスクについて家族に説明を行っている。				
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	積極的な声掛けや連絡は行っていない。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	契約書を基に説明を行い同意を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居に関しては、家族さんと主治医を交え十分な話し合いを行い、納得してもらっている。退居先へスムーズに移れるよう必要な支援を行っている。				
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	事業所に目的や役割について、改めて説明する機会は作れていない。		○		
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	×	地方祭や亥の子等、参加できる行事には参加させてもらっている。日常的な挨拶や町内会・自治会への参加はできていない。コロナウイルス感染症の影響もあり、行事に参加する機会が減っている。		×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、見守りや支援してくれる地域の人を増やす機会が少なくできていない。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	周囲が田んぼや畑で囲まれており、気軽に立ち寄るには難しさがある。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもつうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	散歩に出かけた時等に挨拶を行う程度で、日常的な付き合いができていないとは言えない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	近隣住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図る事の支援や働きかけはできていない。				
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	×	消防との協力はできているが、他施設やスーパー・コンビニ等との関係を深める働きかけができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	コロナウイルス感染症の影響もあり、運営推進会議が出来ていない。	×	/	△	コロナ禍において、事業所では集合形式の運営推進会議は中止され、行政等への中止報告のみに留まっている。今後は、書面での会議開催を行い、事業所内の様子や出来事を取りまとめた資料やつじい新聞等を活用しながら、参加メンバーや家族に報告して意見をもらったり、オンライン機能を活用して会議を開催したりするなど、有意義な会議開催が行われることを期待したい。また、次回の会議は、感染状況を見計らいながら、集合形式の会議開催を予定している。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	×	外部評価結果について、きちんと報告できていない。	/	×	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	テーマに合わせて参加メンバーや日程、時間帯について配慮や工夫ができていない。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	全ての職員が理念について共通認識を持ち、その理念が浸透しているとはいえない。	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	家族さんや地域の人たちに理念が十分に伝わっているとはいえず、伝える機会も少ない。	×	×	/	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	一人ひとりの実力とレベルの把握に努めていて、法人外の研修に関しては受けられるように改善されている。	/	/	/	/
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	計画的に取り組んでいるとはいえず、不十分な面もある。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	△	キャリアパスを取り入れ説明を行っているが、まだまだ浸透しているとはいえない。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	同業者と交流する機会が作れておらず、相互研修などの活動も行っていない。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	×	必要に応じて機会を設けているが、十分とは言えない。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	△	虐待防止について研修会等を通して勉強し理解している。	/	/	○	オンライン配信の研修で、職員は高齢者虐待防止等を学んでいる。擦り傷などが見られた場合には、職員がヒヤリハット報告書を作成し、家族や医師に報告を行うほか、ユニットリーダー等を中心に話し合い、再発防止に努めている。さらに、不適切な言動が見られた場合には、職員同士で話し合うとともに、ユニットリーダー等に伝えて、該当職員へ注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	なるべく、いつでもケアについて話し合う機会が持てるよう心掛けている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	日々、職員とコミュニケーションを図り、疲労やストレスがないか注意を払っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	その都度、現場で話し合ったり、その時々状況が身体拘束に当たらないか検討している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設側の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	説明し理解してもらえよう努めている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	研修会等を通して理解に努めているが、全ての職員がきちんと理解できているとはいえない。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	必要があれば地域包括支援センターや専門機関へ相談するよう努めているが、きちんとした連携体制ができていないといえない。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	緊急時のマニュアルを作成しており、職員へ周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	定期的な訓練は行っておらず、実践力が身についているとはいえない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告・ヒヤリハットについて、個々の事例について各ユニットで共有し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ミニカンファレンスや申し送り等を通して、個々のケースに対して話し合い事故防止に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応は、窓口として管理者が行っているが、全ての職員がきちんと理解し実行できているとはいえない。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情があった場合は速やかな対応に心掛け、必要に応じて市へ報告・相談している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	苦情内容を真摯に受け止め、速やかに対応するようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつけている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	△	十分な機会が作れているとはいえない、それを伝える機会も少ない。	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞き、可能な範囲で対応をしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めているほか、利用者の近況を記載した手紙等を送付する際には、要望があれば伝えてもらっている。また、管理者等は通常業務を職員と一緒に、日頃から声をかけて意見を聞いていることもあり、職員が食事の仕方などの提案が出された場合には、取り入れて対応することもある。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	×	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつけている。	△	代表者が自ら現場に足を運ぶ機会が少なく十分とは言えない。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	利用者・家族などが苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供は十分にできていない。				外部評価の自己評価は、職員に意見を出してもらい、ユニット毎にユニットリーダー等が取りまとめ作成をしている。また、ユニットリーダーを通して、サービスの評価結果を職員に伝え、目標達成に向けて取り組んでいる。今後、集合形式の運営推進会議の開催を予定しており、サービスの評価結果等の報告を予定している。利用者家族等、地域アンケート結果から、サービス評価の取組みに十分な理解が得られていないことが窺えるため、全ての家族へ外部評価の評価結果の良い点や次へのステップを期待されることなどの簡潔に分かりやすくまとめたものを送付したり、コロナ禍の収束後には家族の来訪時に、サービス評価の取組みの目的などを説明したり、目標達成の取組み状況などのモニターの協力を呼びかけるなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を常に持てるよう努めている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	実施できていない。	×	×	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	成果の確認ができていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルを作成し、職員に周知している。	/	/	/	事業所では、各種災害マニュアルの作成をして職員に周知するとともに、年2回昼夜を想定した避難訓練を実施している。コロナ禍以前は、避難訓練に家族にも参加協力をしてもらうことができていた。また、非常災害時の対応や業務継続計画(BCP)をオンライン配信の研修等で学び、現在計画を作成している。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して、十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲載したり、家族や運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取組みが理解してもらえよう、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	日中・夜間を想定して訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	△	消火設備等の点検は行っているが、まだまだ不十分である。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域住民の参加が難しく、他の事業所との連携も取れず、合同の訓練も行っていない。	×	×	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	地域の災害対策には殆ど参加できていない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域に向けた、広報活動や啓発活動ができていない。	/	/	/	法人と連携をしながら、地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。また、コロナ禍において、市行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加できる機会は減少しているものの、法人・事業所として、認知症行方不明者の捜索訓練に協力するなど、連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	×	相談支援の取り組みは行っていない。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	活用できていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	実習の受け入れはできていない。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	地域包括支援センターの認知症行方不明者捜索の訓練に参加する程度で、十分に連携できているとは言えない。	/	/	○	